

【登場人物表】

佐原	悟（40）	：	牧師兼喫茶店マスター
宮崎	奈緒（27）	：	都会の生活に疲れた女
椎名	礼子（35）	：	喫茶クルスの店員
早乙女	真一（38）	：	寺の住職。元教師
伊集院	達也（58）	：	元刑事
中田	大二郎（30）	：	コソ泥。公安刑事
聖月	（20）	：	医学部の女子学生
山村	純一（50）	：	娘を亡くした男
山村	久実（48）	：	山村純一の妻
島村	里香（23）	：	早乙女の元教え子
島村	恭介（53）	：	島村里香の父
椎名	真理（55）	：	椎名礼子の母
佐原	美佐子（30）	：	佐原悟の亡妻
山村	みゆき（25）	：	山村夫妻の亡娘
ダニエル	（42）	：	ローマ教皇の護衛兵
クリステイアン	（36）	：	武器商人
島村のボデイーガード	A		
島村のボデイーガード	B		

ホテルの受付係

客 A : 喫茶クルスの客

客 B : 喫茶クルスの客

テレビの声（ナレーター）

露天商

佐原の教会の合唱団の人々

アフリカの村の合唱団の人々

中東の国の兵士達

○長崎の風景（朝）

長崎港。青空。蝉の声。丘の上の教会。
宮崎奈緒（27）が、スーツケースを
曳いて坂道を上ってくる。

奈緒「（うっとりした顔で）理想的……！」

奈緒、港の風景と教会を交互に眺める。
奈緒、教会に近づく。中からボソボソ
声が聞こえる。奈緒、教会の扉を開け
て中へ入る。

○教会（朝）・礼拝堂の中

佐原悟（40）が壇上で説教をしてい
る。ベンチに十数人の聴衆。その中に、
早乙女真一（38）、伊集院達也（6
0）、中田大二郎（30）がいる。

佐原「……てなわけでイエスさんが言われたそ
うです。右の頬をぶたれたら左の頬を差
し出しなさいってね。いや逆だったかな。
左の頬をぶたれたら……あれっ？」

早乙女「（小声で呟く）おいおい、しっかり
しろよ〜」

佐原「まあ、どっちでもいいですけどね。こんな風にイエスさんは非常に辛抱強いお人だったんですが、一方でエルサレムの商人たちに対して、『神聖な場所で商売をするとは何事だ』と怒って追ひ払うほど短気だったんですね。イエスさんといえども人の子：いや神の子なんだけど：おらかな面と暗黒面の両方があつたんじやないかな、なんてね：」

伊集院「今の発言、大丈夫か？」

早乙女「そろそろ破門でしょうねえ」

佐原「：というわけです。何が言いたいのかわからなくなっちゃいましたけど、本日はこれでおしまい。それじゃ、また来週」

礼拝堂から人々が出て行く。数人が説教壇の横の募金箱にお金を入れる。奈緒、佐原に話しかけようと近づくが、早乙女に先を越される。

早乙女「マスター：じゃなかった牧師さん、先にクルスに行つとくよ」

佐原「ええ。あとで行きます」

伊集院「俺も行ってやるよ」

早乙女と伊集院が出て行く。一人残った奈緒、佐原に近づく。

奈緒「あのお：すみません」

佐原「はい？」

奈緒「私、牧師さんのお話って、初めて聞いたんですけど：」

佐原「あつ、すみません！今度から真面目にやります（慌てて頭を下げる）」

奈緒「すっごく良かったです。感動しました！」

佐原「えっ」

奈緒「ここ、気に入りました。私を弟子にして下さい。牧師見習いとして雇って下さい。出来れば住み込みで」

佐原「ええーっ！」

奈緒「変な女だと思われるのは分かっています。でも：」

佐原「まあ落ち着いて。隣のカフェで話しま

しょう。どうぞ先に行って下さい。すぐに参りますから……」

○喫茶クルス（朝）・外

教会の隣に喫茶店。「クルス」の看板。

○喫茶クルス（朝）・店内

奈緒、店内に入る。早乙女がカウンタ―に座っている。伊集院がテーブル席で新聞を読んでいる。聖月（20）が隣のテーブル席で文庫本を読んでいる。椎名礼子（35）が奈緒に気付く。

礼子「いらっしやい」

奈緒、店内をキョロキョロ見渡す。

礼子「お一人？（奈緒のスーツケースを見て）あら。観光客？」

奈緒「すみません、こちらに牧師さんは……？」

佐原、カウンタ―の奥から出て来る。

佐原「いらっしやい。あ……さっきの」

奈緒「牧師さん？……ですよね？」

佐原「はい。教会と掛け持ちで……なんだかスイマセン」

早乙女「謝るこたあないでしょ」

礼子「とりあえず、座んなよ」

早乙女「（礼子に）お客さんへの言葉遣い！
（マスターに）マスターが教育しなきゃ
ダメでしょ！」

礼子「（舌打ちする）」

早乙女「（小声で）舌打ちいゝ!?」

奈緒「牧師さん：いえ、マスターさん」

佐原「マスターでいいですよ」

奈緒「私をここで働かせて下さい。牧師見習
いがダメならウェイトレスでも何でもや
ります。お願いします！（頭を下げて、
小声で）出来れば住み込みで」

早乙女「最後、なんて言ったの？」

佐原「いいですよ。二階に空き部屋があるか
ら使つて下さい」

奈緒「えっ」

早乙女「えーっ！」

礼子「簡単だな：」

佐原「礼子さん、案内してあげて下さい」

礼子「こっちよ」

礼子、カウンター奥に消える。

奈緒、礼子の後をついて行く。

○喫茶クルス（朝）・二階の廊下

奈緒と礼子、廊下を歩く。4部屋ある。

一つはドアに「佐原」、別の一つは「椎名」のネームプレート。礼子、ネームプレートのないドアの前に立ち止まる。

礼子「あなたの部屋は、ここ。ちょうど一部屋開いてて良かったね」

奈緒「あの…本当にいいんでしょうか。こんなにあっさり受け入れてもらえるなんて思ってたなかったの…」

礼子「あたしん時も、こんな感じだったよ。いいんじゃない？」

奈緒「でも、この馬の骨が分からない女を。犯罪者かもしれないに」

礼子「あなた、犯罪者なの？」

奈緒「いえいえっ。違いますっ！」

奈緒と礼子、空き部屋に入る。

○空き部屋（奈緒の部屋）

奈緒、窓に近づく。窓から港が見える。
視線を転じると、間近に教会の鐘。

奈緒「素敵！ いい眺め……。でも、鐘が鳴ったら、うるさくないかしら？」

礼子「大丈夫よ。その鐘、一度も鳴ったことがないの。っていうか、マスターが絶対に鳴らさないのよね」

奈緒「なんで？ 私、教会の鐘の音って好きだけどなあ」

礼子「理由はマスターに聞いてみて。あたしも実は知らないのよ」

○喫茶クルス（朝）・店内

礼子、二階から降りてカウンター内に入る。

礼子「あの子、長旅で疲れてると思うから休ませといたわ」

早乙女「あの女、訳アリだね。多分、傷心の
独り旅だ」

伊集院「余計な詮索をするもんじゃないよ。

坊主のくせに」

早乙女「タツさんこそ、余計な詮索のプロじゃないか。どういう女か調べてよ」

伊集院「『余計な』は余計だな。それに『詮索』じゃなくて捜査、『プロ』じゃなくて元プロ」

早乙女「東京から来た女だな」

礼子「どうして分かるのよ」

早乙女「都会の女の匂いがする」

礼子「やらしい！ 坊主のくせに」

早乙女「なんだよ。坊主が恋をしちゃダメなのか？」

伊集院「（読書中の聖月に）それにしても、よくこんな騒々しい環境で本が読めるね」

聖月「（冗談っぽく）集中力が違うんです」

早乙女「ねえマスター、何か言ってるよ。同じ聖職者じゃないですかあ」

礼子「煩惱の日本代表のくせに聖職者ねえ」
伊集院「セイシヨクの意味が違うんじゃないねえ

か？」

礼子「聖月ちゃん、耳を塞いで！」

奈緒「二階から降りてくる。」

佐原「旅の疲れは取れましたか？」

奈緒「はい。ありがとうございます。改めまして宮崎奈緒です。よろしくお願いします。」

礼子「あたし、椎名礼子。よろしく！」

早乙女「早乙女です。真一って呼んで。シン

ちゃんでもいいよ」

礼子「軽っ。てゆーか、なんでアンタまで自己紹介すんのよ」

早乙女「すぐその寺で住職やってます。独身です。で、そこのご隠居がタツさん」

伊集院「誰がご隠居だよ！」

早乙女「あれっ。苗字、何だったっけ？」

伊集院「客の紹介は要らないだろ」

礼子「ここにいる時間、あたしより長いんだから、いいんじゃない？」

早乙女「その女の子は、聖月（みづき）ち

ゃん。頭良いんだよ。医学部だって！」

聖月「（ぺこりと頭を下げる）よろしくです」

早乙女「あっ。重要人物を忘れるとこだった」

佐原「忘れないで下さいよ」

早乙女「マスターの名前って佐原だけ。隣

の教会の牧師なんだけどね。どっちが本

業なんだか。（佐原に）どっち？」

佐原「どちらも副業です」

全員、静まり返る。

礼子「マスター。冗談なのか本気なのか分かりにくいです」

○長崎の風景（夕）

青空に白い雲。カモメの鳴き声。船の

汽笛。教会のステンドグラスに陽が注

ぐ。

○喫茶クルス（夕）・店内

奈緒、カウンターで泣きじゃくる。

奈緒「：だから私、彼に言ってやったのよ。

もう二度と顔を見たくないって。指輪は

返さずにメルカリで売ってやったわ。あ

んな奴との思い出なんて、金に換えられるくらいよ。ザマーミロよ！」

佐原「：お酒、飲ませた？」

礼子「（首を振る）まだ6時前ですよ」

柱時計が鳴る。時刻が6時を示す。

礼子「あ。6時だ」

佐原「礼子さん、お願いします。シンちゃん
とタツさんも」

早乙女「あいよ」

伊集院「了解」

伊集院、黒板メニューを裏返して夜の
メニューにする。

○喫茶クルス（夕）・外

早乙女、店の看板「喫茶クルス」を裏
返して「バー・クルス」にする。

○喫茶クルス（夕）・店内

礼子、数種類の酒とカクテル道具をカ
ウンターに並べる。

奈緒「何、何：何これ？　びっくりハウス?!」
佐原「うちは6時になるとバーになるんです」

早乙女「さー、飲むぞー！」

礼子、早乙女に冷たい視線を投げつつ、
二階へ上がる。

聖月「じゃあ私、帰ります」

佐原「気をつけてね」

伊集院「ハタチになったらね」

早乙女「またね」

聖月が店を出る。

早乙女「ここからは大人の時間でーす」

礼子、二階から降りてくる。バーテン
ダーの服装に着替えている。

礼子「誰が大人だって？」

奈緒「うわっ。何ですか、その恰好」

礼子「（シェイカーを振る）見ての通りよ」

早乙女「出ました。クルス名物、礼子ちゃん
の早着替え。今度は生着替えでお願いま

す」

礼子「マスター：この人の頭、ウイスキーの

瓶で殴っていい？」

佐原「安い瓶にして下さいよ」

伊集院「礼子ちゃん、いつものギムレット：」
礼子「へい、お待ち（ギムレットを出す）」

奈緒「早っ」

早乙女「礼子ちゃん：礼子さま。僕にはビールをちようだい」

礼子「何度言ったら分かるんだい。居酒屋じゃないんだからビールじゃ分からないよっ。世間じゃ『生ビール！』とか『生中（なまちゅー）！』なんて注文してるけど、ここじゃ通用しないよ。きちんと銘柄を言いな。べらぼうめい！」

早乙女「すいやせん。じゃ、ギネスを」

礼子「（にっこり笑う）喜んでく！」

伊集院「：どっちが居酒屋なんだか」

奈緒「私も今日はお客さんでいい？ ラフ口イグをストレートでお願いします」

礼子「いいよ。氷は？」

奈緒「氷は要りません。水だけで」

礼子「おっ。分かってるね」

店内にジャズピアノのBGMが流れる。

奈緒「そういえばマスター、教会に立派な鐘
がありますけど、鳴らしたことがないっ
て本当ですか？」

佐原「ああ：あの鐘はね：」

○（回想はじめ）中東の国らしき街

大きなクリスマスツリーの前で、様々
な国籍・人種の人々が合唱している。
佐原、佐原美佐子（30）と一緒に合
唱に交じり、楽しそうに笑っている。

（回想終わり）

○喫茶クルス・店内

佐原「あの鐘は、この世界に本当の平和、本
当の愛が：」

* * *

（フラッシュユ）

微笑む美佐子の顔。

教会の鐘。

美佐子（声）「私の実家の教会に、古いけど
立派な鐘があるの。その鐘は、この世界
に本当の愛が訪れた時に鳴るといいう言

伝えがあるのよ。なんだか素敵でしょ。
早く、そんな世界が訪れるといいわね」

* * *

佐原「（遠くを見つめる顔）：本当の愛の世界がやって来た時に鳴らす鐘なんだ。だから：」

奈緒「（うつとりした顔）綺麗な音だろうなあ。
ああ、聴いてみたいなあ」

佐原「（厳しい顔になる）そんな世界は訪れない。だから、鐘が鳴ることはない」

奈緒「えっ？：（小声で礼子に）マスターどうしちゃったの？」
首を傾げる礼子。

○長崎の風景（夜）

長崎港の夜景。教会の鐘。夜空に月。

○喫茶クルス（夜）・店内

伊集院「おやすみ」

早乙女「また明日」

早乙女と伊集院、店を出る。

佐原と礼子、店の後片付けを始める。

奈緒、何をすべきかキヨロキヨロする。
佐原「奈緒さんは、戸締りの確認をお願いし
ます」

奈緒「あ、はい」

○喫茶クルス（夜）・二階の廊下

佐原・奈緒・礼子、それぞれ自分の部
屋に入る。

佐原「おやすみなさい」

礼子「おやすみ」

奈緒「おやすみなさい」

○奈緒の部屋（夜）

奈緒、部屋の明かりをつける。
窓辺へ行き、カーテンを開ける。

奈緒「（夜景を見て）わあ…綺麗！」

奈緒、教会の鐘を見る。

奈緒「鳴らない鐘かあ。勿体ないなく」

○教会（夜）・外

辺りを窺いながら教会に忍び込む人影。

○奈緒の部屋（夜）

奈緒「えっ！…ど、泥棒!？」

○喫茶クルス（夜）・二階の廊下

奈緒、廊下を走り、佐原と礼子のドアを叩く。

奈緒「泥棒！ 泥棒よーっ！」

○教会（夜）・中

中田大二郎、募金箱に近づき、手をかける。と同時に、明かりがつく。出入口に奈緒と礼子が立っている。

礼子「誰っ?!」

中田、募金箱に手を入れた状態で硬直。はっと我に返り、慌てて逃げる。

礼子「待て、こらーっ！」

奈緒「警察くっ！ 110番くっ！」

逃げる中田、出入口で佐原と鉢合わせ。中田、奇声を発して佐原に襲い掛かる。佐原、見事な体捌きで攻撃を躲し、あつという間に中田の関節をキメて動けなくする。

奈緒「マスター、すごい！」

礼子「やだ、スマホ置いてきちゃった。奈緒

ちゃん、早く110番して！」

奈緒「ごめんなさい。私もスマホ持って来な
かった」

礼子「えーっ」

中田「いてててて！　ごめんなさい、ごめん
なさい！」

佐原「どうしてこんな悪いことをするのです
か？」

中田「すみません、すみません：妹が難病指
定のアレキサンダー病で、どうしても治
療費が必要なんです。会社も首になって
アパートも追い出されるし。もう、どう
したらいいか分かんなくて：」

奈緒「可哀想：」

礼子「そんな話、嘘に決まってるでしょ！」

佐原「いくら必要なんですか？」

礼子「マスター！」

中田「いや、あの：」

佐原「嘘をつくなら普通は癌とか白血病でし
ょう。咄嗟にアレキサンダー病は出てこ

ないです。とりあえず、その箱の中身は全部差し上げます。それから：（はめていた腕時計を外す）これも少しは足しになるでしょう。もう少し待っていただけなら、妹さんのために知り合いの医者」と病院を紹介しますよ」

礼子、呆れた顔。

奈緒、驚いて佐原と中田を交互に見る。

中田「（涙を流す）なんなんだよお：あんだ」

中田、号泣する。

○喫茶クルス（朝）・店内

雀の囀りが聞こえる。

奈緒、ウェイトレスの制服姿で2階から降りてくる。

奈緒「どうですう？　これ、似合ってますう？　：ん?!」

中田、床で土下座している。礼子、怒った顔で腕組み。奈緒、立ち止まる。

中田「お願いします。ここで働かせて下さい！」

奈緒 「どこかで聞いたセリフだなあ」

佐原 「顔を上げて下さい」

礼子 「：嫌な予感」

佐原 「いいですよ。こんな店でよければ」

礼子 「マスター！」

佐原 「住む所は、あるんですか？」

礼子 「ちよつと、ちよつとオス！」

佐原 「うちの2階、あと1部屋、空いていますので、良かったら使つて下さい」

礼子 「あそこ、物置になつてますけど」

中田 「ありがとうございます！ 物置でも犬小屋でもトイレでもいいです」

奈緒 「トイレは困るけど：」

礼子 「マスター！ うら若い乙女達が暮らす同じ屋根の下に、こんなケダモノみたい な男を入れるんですか？」

中田 「ケダモノ？ ひどいや：」

佐原 「一応、私も男なんですけど」

礼子・奈緒 「（口を揃えて）マスターは別よ」

中田「なんでだよっ」

ドアチャイムが鳴り、伊集院が入る。
後ろから早乙女と聖月も入る。

伊集院「どうした、どうした？ 何か揉め事

か？」

佐原「紹介します。新しい仲間の：ええっと、
誰だっけ？」

中田「中田大二郎です。お願いしやーす！」

早乙女「じゃあ君、今日から『大二郎』ね。

それとも『大ちゃん』がいい？」

伊集院「お前、どっかで見た顔だな」

奈緒「えっ。皆さん、馴染むの早過ぎませ
ん？」

礼子「ここは、そーゆートコロ。ところであ
なた、なんでそんな格好してるの？ う

ちは制服なんか着なくていいのよ」

奈緒「礼子さんだって着てるじゃないですか」

礼子「あたしは趣味で着てんの。」

奈緒「ずるーい！」

礼子「そんな服、どっから持って来たのよ」

中田、スマホで皆の写真を撮り始める。

佐原「聖月さんは、大学は夏休みなんですネ」

聖月「はい。だから毎日ここに来て勉強しようか。なつて。図書館より落ち着くんです」

伊集院「嬉しいこと言うねえ」

早乙女「あれっ。大学の試験期間は終わったでしょ。医師国家試験も再来年だと思うけど」

聖月「ええ。今勉強してるのは司法試験です」

伊集院、口からコーヒーを吹き出す。

他の者達も驚いた顔で聖月を見る。

早乙女「ええと…確認だけど、聖月ちゃん、は医学部だよね？」

聖月「はい」

早乙女「でも、司法試験も受けるんだ？」

聖月「はい」

中田「すげえーっ！」

奈緒「マスター…ところで気になることが…」

佐原「何でしょう？」

奈緒「新参者の私がいうのもナンですけど…」

お客さんの数より店員の方が多くありません？」

礼子「それは私も気になってたのよ。マスター、ちよつと」

礼子、佐原を手招きし、片隅で何やらゴソゴソ話す。佐原が礼子に叱られている様子。

佐原、しょんぼりと戻って来る。

佐原「あのお：中田君。（咳払いする）」

中田「はい？」

佐原「申し訳ないけど、うちはもう従業員、定員オーバーだそうです。：もし良かったら、近くの食堂がアルバイト募集してるから紹介しますよ」

中田「はあ：」

礼子、奈緒にピースサイン。

奈緒、親指を立ててグッジョブのサイン。

○喫茶クルス（夜）・二階の廊下

佐原「今日もお疲れ様。おやすみなさい」

奈緒 「おやすみなさい」

礼子 「おやすみマスタ」

佐原、自分の部屋に入る。

礼子 「あたしの部屋で、ちよつと飲まない？」

奈緒 「いいいですねえ」

○ 礼子の部屋

壁にヘビメタのバンドのポスター。エ

レキギターが所狭しと並んでいる。

礼子 「狭っ苦しいけど、適当に座って。あ：

あなたの部屋も同じ間取りか」

奈緒 「礼子さん、ヘビメタ好きなんです」

礼子 「子供の頃から行儀の良い家庭でさ。ク

ラシックばかり聴いてたから反動かな」

礼子、冷蔵庫を開ける。中に様々な銘

柄の瓶ビールがぎっしり。

奈緒 「わあっ。凄い！」

礼子 「どれがいい？」

奈緒 「ヒューーガルデンがいいです」

礼子 「じゃ、あたしはシメイブルーにするか」

奈緒・礼子、各々グラスに自分でビ

ルを注ぐ。

奈緒「乾杯しましょ！」

礼子「何に？」

奈緒「そうですねえ：（照れつつ）新しい仲

間：いや家族との出会いに、とか？」

礼子「家族ねえ：ま、いいや。乾杯！」

奈緒「私、ちよつと気になってるんですけど」

礼子「何が？」

奈緒「教会って、そんなに儲からないでし

よ？ それに、こう言っちゃナンだけど

：カフェの方もお客さんが多いとは思え

ないし」

礼子「心配してくれてるの？ マスターが聞

いたら泣いて喜ぶわよ」

奈緒「いやホント、真面目な話。大丈夫なの

かなあって」

礼子「ま、実際、赤字なんだけどね。どうい

うわけかマスターの懐から資金が潤沢に

出てくるのよ。不思議なんだけど」

奈緒「ひよつとしてマスターって大金持ち？

趣味で牧師や喫茶店をやっているの？」

礼子「沢山お金を持つてるのは間違いないわね。宝くじに当たったのか、それとも悪い事して稼いだのか知らないけど」

奈緒「あたし、調べてみる！」

奈緒、スマホを取り出し、調べ始める。

礼子「あんまり詮索しない方がいいと思うよ」

奈緒「ほら。出てきた！」

奈緒、礼子にスマホの画面を見せる。

奈緒「びっくりよ。マスターって昔、特派員だったのね。中近東やアフリカで記事を書いてる……」

礼子「見つけるの早っ！」

奈緒「(スマホ画面で何かを発見して) ……ええっ!？」

礼子「どうしたの？」

奈緒「これ…(スマホ画面を礼子に見せる)」

礼子「ああ、それも見つけちゃったのね」

奈緒「知ってたの？」

礼子「まあね。牧師とはいえ、女一人で見ず

知らずの男のうちに居候するんだもの。
住む前に徹底的にマスターの素性は調べ
たわよ」

奈緒「ああ。マスターに、こんな過去があつ
たなんて……」

奈緒のスマホ画面。「××国でクーデ
ター勃発。銃撃戦で日本人女性が巻き
込まれ死亡。通信社の特派員・佐原悟
氏の妻、美佐子さん」と書かれている。

○ 佐原の部屋（夜）

佐原、ベッドに横たわり、テーブルに
置いたフォトフレームの美佐子の写真
を見ている。

○（回想はじめ）中東の国らしき街角

大きなクリスマスツリーの前に、肌の
色や年代が異なる人々が集っている。
佐原と美佐子の姿もある。人々が「ア
メイジング・グレイス」を合唱する。

美佐子（声）「私、この歌が大好き。人類が、
世界が、本当に平和で愛に満ちた気持

ちになれるの：」

佐原と美佐子、人々と共に笑っている。
突然、銃声。バタバタと倒れる人々。
兵士達が現れ、無差別に発砲する。悲
鳴を上げて逃げ惑う人々。

（回想終わり）

○佐原の部屋（夜）

佐原、ベッドに横たわったまま美佐子
の写真を見つめている。

○教会（朝）・外

教会の屋根に雨が降り注ぐ。

○喫茶クルス（朝）・外

早乙女、雨の中、傘をさして喫茶クル
スへ駆け込んでくる。

○喫茶クルス（朝）・店内

早乙女「いや、参った参った。天気予報、外
れたね」

奈緒「いらっしやいませ」

礼子「もうすぐ止むと思うわよ」

奈緒「そういえば長崎って日本で一番雨が多

い県ですよね？」

早乙女「意外とそうでもないんだよ。高知や
鹿児島の方が降水量は多いし、雨が降る
日数だと石川県がトップなんだよね」

奈緒「へえ。意外ですね」

礼子「長崎って雨のイメージだもんねえ」

早乙女「歌の影響かなあ」

奈緒「何の歌ですか？」

佐原「長崎は今日も雨だった」

早乙女「ワワワワ♪」

奈緒「：知らない」

ドアチャイムの音。

伊集院、店内に入って来る。

奈緒「いらっしやいませー」

早乙女「もう雨やんだの？」

伊集院「着いた途端にやんだよ。まあ、人生

こんなもんかな」

○教会（朝）・外

雨上がりの陽光が教会の屋根に光る。
ステンドグラスが煌めく。

○喫茶クルス（朝）・外

出入口の傘立てに色とりどりの傘。

○喫茶クルス（朝）・店内

店内に客が増えている。

奈緒、テーブル席の客の注文を取り終えてカウンターに戻って来る。

奈緒「雨と言えば、長崎のイメージって坂道とか教会とか港の夜景もですよ」

佐原「たしかに夜景は綺麗ですよ」

奈緒「はい。（二階を指差して）部屋からも見えますね。堪能しましたあ」

早乙女「異国情緒に憧れて、長崎で暮らそうと思ったの？」

奈緒「はい。石畳の坂道って憧れますよね」

伊集院「観光客は皆、そう言うんだよね。でも、ずっとここに住んでる俺に言わせる

と、坂ばかりで住みにくい街だよ」

奈緒「でも、石畳って風情がありますよね」

伊集院「俺が子供の頃、うちの前が石畳だったけどさ。あちこち剥がれて道が凸凹で

歩きにくいし、よく転んで怪我したもののさ。観光名所の石畳はすぐ修復してくれるけど、住宅街の石畳なんて、ほったらかしだもんな」

佐原「それに、坂道が多いから、日本で一番『自転車売れない県』だそうですね」

早乙女「確かに。長崎の人って、自転車に乗れない人が多いって聞くよね。スポーツ万能の人でも自転車は乗れないとか。(二ヤツと笑う) タツさんも乗れないんですよ？」

伊集院「うるさいな」

奈緒「えーっ。そうなんですか？」

礼子「コワモテの刑事だったのに意外だよな」

奈緒「そう言うシンさんは乗れるんですか？」

早乙女「俺は福岡の久留米出身だから。(伊集院を見て自慢げに) 普通に乗れるよ」

奈緒「マスターと礼子さんは？」

佐原「私も生粋の長崎県人じゃないんですよ」
礼子「あたしも。仙台から東京に出て、最終

的にここに落ち着いちゃったから」

奈緒「あら：意外と県外の人が多いんですね」

伊集院「この中で生粋の長崎県人は俺だけか」

奈緒「でも、タツさん、訛ってないですね」

伊集院「みんなに合わせてるだけばい。標準

語も喋れるばってん」

奈緒「急に訛るんですね：」

伊集院「俺は生まれも育ちも長崎たい」

早乙女「あつ、その言い方！好きじゃない

なく」

伊集院「なんだよ」

早乙女「『生まれも育ちも』ってやつ。俺、

生まれたのは長野なんだけど、物心つい

てからずっと福岡なんだよね。こーゆー

場合、よく『ご出身は？』って聞かれた

らどう答えればいいのか？」

佐原「そういう場合、出生地が長野、出身地

が福岡で良いんじゃないでしょうか？」

礼子「ごもつとも」

早乙女「でも、中には出生地と出身地は同じ

ものだと思ひ込んでる人がいて、『生まれ育ちはどちらですか？』なんて聞く人がいるんだよな。返事に困っちゃうよ」

佐原「うーん。確かに……」

早乙女「なんか腹が立つんだよね。でも『出生地と出身地が異なるんですけど、どっちを答えればいいですか？』なんて答えると人間関係に角が立ちそうだし」

礼子「屁理屈こねる男は好きじゃないなあ。どうでもいい話ね」

早乙女「どうでもよかあないよ。個人のアイデンティティに関わる問題だよ」

ドアチャイムが鳴る。

聖月、店内に入る。

礼子「いらっしやい」

奈緒「あ。聖月ちゃん」

聖月「こんにちは」

奈緒「丁度よかった。聖月ちゃん、生まれ育ちは……（早乙女を気にして）生まれた所と育った所は同じかな、それとも違うか

な：じゃなくて、それぞれどこかな？
あれれっ…分かりにくい？」

聖月「（瞬時に理解した微笑）生まれたのは
ベルギーですけど、幼い頃は海外を転々
として…出身地と言えば長崎です」

奈緒「べ、べるぎいくっ?!」

礼子「想定外の答えだったでしょ」

佐原「まあ、人それぞれって事ですよね。人
はどうしても自分が持ってる物差しで他
の人を測るけど、物差しの目盛って一人
一人違ってても良いんじゃないでしょう
か？」

伊集院「そういえば奈緒ちゃんの出身地って
どこなの？」

早乙女「あ。当てる、当てる！ 絶対、東京
でしょ。江戸っ子だ！」

奈緒「はい。実家は中目黒ですけど…どうし
て分かるんですか？」

早乙女「ほら！（腰に手を当てて自慢ポー
ズ）」

伊集院「東京で何か辛いことがあって、こつちに来たの？」

一同、場が凍り付くように静まり返る。

早乙女「：ズバツと聞くなあ」

礼子「ど真ん中ストレートの剛速球：」

奈緒「はい！（満面の笑みで）何か、ありました！」

奥のテーブル席の客から「すみませーん」と呼ぶ声。

奈緒「はーい」

奈緒、奥のテーブル席へ向かう。

早乙女「タツさん：デリカシーって言葉、知ってる？」

伊集院「それを今、実行したところだよ」

早乙女「：？」

奈緒、奥のテーブル席から戻って来る。

奈緒「マスター」

佐原「はい？」

奈緒「あのご夫婦、とっても素敵ですよ。

私もいつか、あんな夫婦になりたいなあ

：

奥のテーブル席で、山村純一（50）と山村久実（48）が穏やかに微笑みながらコーヒーを飲んでいる。

早乙女「（奈緒に）誰と？　好きな相手でもいるの？」

伊集院「お前の方がデリカシーないじゃないか」

奈緒「そんな人がいつか現れたらいいなって。でも、もう無理かも」

礼子「もう恋なんてしない、か」

早乙女「そんな歌があったよね。（歌おうとするが出てこない）：思い出せない！」

礼子「無理に歌わなくていいから」

伊集院「聖月ちゃん、今日は何の本を読んでるの？」

聖月「これです」
聖月、読んでいた本の表紙を見せる。

本の表紙。「カント　純粹理性批判」

伊集院「ごめん。聞いた俺が馬鹿だった」

奥のテーブル席から山村が佐原に声を掛ける。

山村「あの、すみません」

佐原、山村夫妻のテーブル席に近づく。

佐原「はい、何でしょう？」

山村「この辺りで美味しいちゃんぽんを食べさせてくれるお店をご存じありませんか？ 食べ物のごことは土地の人に聞くのが一番良いと思います。：」

佐原「ご夫婦でご旅行ですか？」

山村「はい」

佐原「いいですねえ」

久実「娘が暮らしていた所を見たくなくて：

素敵な街ですね」

礼子「この坂の下に『呑気屋』って超オススメの店があるけど：ちよつと坂道がキツイかな：？」

佐原「呑気屋と言えば、最近新しいアルバイトが入って出前を始めたから、ここに持って来てもらいますよ。：」

山村「えっ。でも、そんなことまでしていた
だいては申し訳ないので：」

佐原「いいんです。私たちも一緒にいただく
ことにしましょう。それに：奥様の足、
あまりお具合が宜しくないんじゃない
せんか？」

山村「えっ。どうしてそれを：？」

佐原「店に入ってもらった時から、少し左足を
庇うように歩いてもらっしまいました。
時々、膝をさすってましたし。：差し出
がましいことを、すみません」

山村「いえ、助かります。では、お言葉に甘
えて出前のちゃんぽん、お願いします」

○喫茶クルス・外
坂道を上がって来る出前のバイクが、
店の前で停まる。店員が岡持ちを持っ
て店内に入る。

○喫茶クルス・店内
岡持ちを持った店員が入って来る。
店員は中田大二郎だった。

中田「お待たせしました。呑気屋です」
奈緒・礼子「ええーっ！」
奈緒「何やってんの、あんた」
礼子「あ。マスターが紹介した店って」
中田「俺、呑気屋で働かせてもらってます。
その節はお世話になりました」
奈緒「お世話に、じゃないわよ」
伊集院「知り合いか？」
奈緒「はい。この人、ドロボー」
中田「おいおい！」
奈緒「だって本当のことでしょ」
礼子「奈緒ちゃん、本当のことだったら何で
も口にしていいわけじゃないのよ！」
中田「その節は、本当にすみませんでした」
奈緒「ちゃんと真面目に働いてるの？ 本当
に心から反省したのね？」
佐原「なんだか出来の悪い弟を叱ってるみた
いですね」
礼子「住み込みで、出前までやってるの？
今どき配達業者じゃなくて店員が出前す

るのって珍しくない？」

中田「店の大将にお願いしたんです。ぜひ、自分でやりたいって。その方が皆さんに会えるしね」

伊集院「お前、どっかで見た顔だな」

中田「いえいえ、滅相もない。どこにでもいる二枚目っすよ」

早乙女「話が見えないんだけど：誰なの？」

礼子、早乙女に耳打ちする。

早乙女、驚いた顔をする。

早乙女「マスターも人が良すぎるといっか：」

中田「そんなことより、温かいうちに食べて下さいよ」

中田、テーブルやカウンターにちゃんぽんを並べる。奈緒と礼子も手伝う。

山村「お気遣い、本当に恐縮です」

久実「他のお店の料理を配達していただくなんて、なんだか申し訳ないわ：」

佐原「いいえ。ちょうど私たちも食べたかったの、いいんですよ」

中田「毎度ありいゝ。またヨロシクです」
伊集院「おい。ちよつと待てよ」

伊集院、中田の顔を凝視する。

中田、視線を逸らす。

中田「すいません。まだ配達途中なんで……」

中田、そそくさと店から出て行く。

伊集院「どつかで見た顔なんだよなあ」

奈緒「そりゃあ泥棒ですからね。昔、逮捕し

たことあるんじゃないですか？」

礼子「もう……タツさん、ただでさえ怖い顔な

んだから、やめなさいよ」

伊集院、納得がいかない顔で首を捻る。

早乙女「いただきますーす」

全員、「いただきます」とちゃんぽん
を食べ始める。

客A「すみません。関係ない僕たちの分まで」

客B「ちゃんと代金は払いますから……」

佐原「いえいえ。こっちが勝手に注文したん

だから気にしないで下さい。大勢で食
べ
る方が美味しいですし」

奈緒「あの人達、マスターの知り合いですか？」

佐原「いえ。初めてのお客様です」

奈緒「えっ！知らない人にも：!?」

早乙女「マスターらしいや」

○（回想はじめ）美佐子の顔

美佐子「与える人が一番幸せなのよ。だから、人に優しくする時は『優しくさせてくれてありがとう』って心の中で感謝しなくちゃ、ね」

（回想終わり）

○長崎の風景（夕）

長崎港。夏の夕暮れ。教会に夕陽が差す。喫茶クルスの窓際。風鈴が鳴る。

○喫茶クルス（夕）・店内

山村「なんだか一日中ここにいて、すみませんでした。ちゃんぽん美味しかったです。ありがとうございますございました」

久実「私の足が急に悪くなったばかりに、ご迷惑をかけて申し訳ありません」

佐原「いえいえ。ご迷惑だなんて」

久実「楽しかったわ。皆さん本当に楽しい方たち。また旅行に来たら、お邪魔させていただけようかしら？」

佐原「ぜひぜひ。またお越し下さい」

久実「でも一番驚いたのは、あのお嬢さん。

聖月さん：だったかしら？」

（回想はじめ）

ドアチャイムが鳴り、聖月が入店。

奈緒「いらつしやい」

聖月「こんにちは」

聖月、山村夫妻の隣席に座る。

山村夫妻、聖月を見て驚愕の表情。

聖月「？：こんにちは」

山村「こ、こんにちは：」

久実が両手を口に当て、俯いて震える。

山村が久実の肩を抱く。

佐原「どうしました？　ご気分でも？」

山村「：すみません。実は、そちらのお嬢様

が、私達の娘にあまりにも良く似ている

ものですから：」

聖月「私？」

久実、ハンカチで目を拭う。

山村「ええ。まるで生き写しのようです」

久実「（聖月に）あなた、お名前は？」

聖月「ミヅキです」

久実「どういう字をお書きになるの？」

聖月「聖なる月と書いてミヅキといいます」

久実「あら。良い名前ね」

山村「娘はミユキという名前でした。名前ま

で似ていますね：」

山村夫妻と聖月、楽しそうに語り合う。

その姿を見つめる佐原。

（回想終わり）

奈緒「あっ。タクシーが来たみたい」

○喫茶クルス（夕）・外

店の外で丁寧にお辞儀をする山村夫妻。

山村、久実を介助しタクシーに乗車。

タクシーが出発。見送る一同。

早乙女「いいご夫婦でしたねえ」

佐原「ええ…（何故か哀しい表情）」

* * *

（フラッシュユ）

美佐子「人は…悲しみを乗り越えられるよう
な強い人って、あんまりいないと思うの。
悲しみと一緒に生きていくしかないけど、
それが出来るくらい、強い思い出があれば、
ばいいと思うの。そういう思い出を作る
ために私達は生きているんじゃないかし
ら…」

* * *

早乙女、喫茶クルスの看板を裏返す。

○ 喫茶クルス（タ）・店内

礼子「今からがバータイムで楽しいのに。山
村さん帰っちゃうなんて勿体ないなく」

佐原「明日の朝早く、東京に帰るそうだから
仕方ないですよ」

奈緒「東京…」

○（回想はじめ）東京

ビル群。オフィス街。

上司に叱責されている奈緒の姿。上司が奈緒の机を蹴る。居酒屋。男性社員が馴れ馴れしく奈緒の肩を抱く。愛想笑いを浮かべて男性にビールを注ぐ奈緒。道で親子連れとすれ違う奈緒。子供を抱っこする父親の顔を見て驚く奈緒。気まずそうな父親。その男性とホテルのバーで口論する奈緒。泣きながら出て行く奈緒。

（回想終わり）

佐原「奈緒さん？」

奈緒「：あ：はい」

佐原「大丈夫？」

奈緒「え：はい」

ドアチャイムが鳴り客が入店。

奈緒、いらっしやいませと駆け寄る。

佐原、奈緒を温かく見守る。

○長崎の風景（夜）

長崎港の夜景。夜空の下の教会。

喫茶クルスの明かりが消える。

○喫茶クルス（夜）・二階廊下

佐原・奈緒・礼子、各々の部屋へ歩く。

礼子「今日も色んなことがあったね」

奈緒「なんか楽しいっ♪」

佐原「明日もよろしくね。お疲れ様」

奈緒「おやすみなさい」

礼子「（飲む仕草）今日も女子会、やる？」

奈緒「喜んでー！」

○礼子の部屋（夜）

座卓にビールやワインの瓶とグラス、

おつまみの缶詰、菓子袋が散乱。

奈緒「ねえ。早乙女さんって一体、何者？」

礼子「早乙女：シンちゃんのこと？ あら。

気になるの？」

奈緒「そういうんじゃない。さっきシンさんが聖月ちゃんと話してるのを聞いてたら、二人で物理とか数学とか宇宙とか難しい話で盛り上がったのよね。そんな坊さんって珍しくない？」

礼子「シンちゃん昔、高校の先生だったのよ。でも物理や数学じゃなく国語教師だったと思うけど！」

奈緒「えっ。シンさん、先生だったの？ 見えなくない！ ていうか、あんなスケベが高校教師だなんて、危なくない？」

礼子「：（真顔になる）この話題、本人の前でしちゃダメよ。余計な詮索もダメ！」

奈緒、スマホをいじって調べ始める。
礼子「おいつ。言ってる傍から！」

奈緒「あ、見つけちゃった。：礼子さん：知ってたの？」

礼子「地元じゃ話題になったからね。でも、その記事、半分はデタラメよ。シンちゃんが教え子の女子高生と付き合ってたのは本当だけど」

奈緒「じゃあ、その女子高生が自殺未遂したというの？」

礼子「：それも本当。でも実際に何があったかなんて当人同士しか分からないのね

え：（ため息）

奈緒「シンさん、不倫してたのね」

礼子「だから余計な詮索するなって：まあ隠してもすぐ調べるだろうから教えるけど：そうだよ。それで奥さんや子供と別れて、学校も辞めたってワケ」

奈緒「自業自得よ：不倫なんて絶対ダメ！犯罪よ。シンさん見損なったわ。学校を首になったり離婚したぐらいじゃ、まだまだ軽いわよ！」

奈緒、ワインをぐいっと呷る。

礼子「あんたさあ：（言いかけて、やめる）」
○教会（朝）・礼拝堂

説教壇に佐原。ベンチに座る人々の中に、早乙女、伊集院、奈緒、礼子、聖月、中田の姿が見える。

佐原「おはようございます。また日曜日がやってきましたね。当たり前のように思えますが、これもまた奇跡なのです。私達は毎日、ありがたい小さな奇跡が溢れる

世界で生かされているのです」

ベンチで聴いている人々。リラックスした姿勢で寛いでいる。

佐原「ところで今日は合唱団の練習日ですね」

早乙女「あっ。やべっ……！」

佐原「団員の皆さんは、このあとで練習がありますから、忘れずに……いや、サボらずにクルスへ集合して下さいね」

早乙女、そっと抜け出そうとする。

伊集院、早乙女の襟首をガシッと掴む。

伊集院「観念しな」

早乙女「……（情けない顔）」

○喫茶クルス（朝）・外

入口ドアに「貸切中」の札。

○喫茶クルス（朝）・店内

男女十数人が合唱の練習中。その中に、

早乙女、伊集院、奈緒、礼子、中田、

聖月もいる。

奈緒「私、教会の合唱団って初めて。キリスト教徒じゃないけど、いいのかなあ……」

礼子「あたしだってクリスチャンじゃないわよ。むしろ無神論者だから罰が当たりそうね」

早乙女「そんなこと言ったら俺はどうなるんだよ。教会の合唱団に坊さんが混じってるんだぜ。ねえ、奈緒ちゃん」

奈緒、無視してピイツと横を向く。

早乙女「：？」

礼子「（中田に）なんでアンタがここにいるのよ」

中田「いいじゃないっすか。僕、マスターの弟子なんだから」

佐原「はいはい。お喋りはオシマイ。練習を始めますよお」

佐原、指揮棒を振る。「アメイジン
グ・グレイス」と思しき曲の合唱が始まるが、聞くに堪えない下手さ。

佐原「ストップ、ストップ。もう一回初めから。アルトはソプラノをよく聴いて。テノールは音程をしつかり。バスはテンポ

を合わせて」

合唱団の練習が続く。

○喫茶クルス（朝）・外

店の前に黒塗りの高級車が停まる。

○喫茶クルス（朝）・店内

佐原「今日の練習はこれでおしまい。皆さん、

お疲れ様でした」

人々が「おつかれー」と口々に言いながら出て行く。常連客だけ店内に残る。

○喫茶クルス（朝）・外

佐原、入口ドアに掛けた「貸切中」の札を外す。佐原、黒塗りの車に目を止めるが、何も言わず店に入る。

○喫茶クルス（朝）・店内

奈緒「いやー、思った以上にスパルタだったわー」

礼子「だって、みんな下手くそなんだもん」

早乙女「それにしても、合唱に懸けるマスタ

ーのあの情熱……一体何なんだろうね。人が変わったみたいになるよねえ」

佐原、店内に戻り、伊集院に何かを耳打ちする。伊集院、険しい表情で頷く。

早乙女「ねえマスター、まだ一曲しか練習してないけど、これってクリスマスまで間に合うの？」

佐原「大丈夫です。一曲出来れば十分です」

○喫茶クルス（朝）・外

黒塗りの車のドアが開く。体格が良く人相の悪い男二人（佐原のボディガードA及びB）が出てくる。続いて、ゆっくと島村恭介（53）が出てくる。

○喫茶クルス（朝）・店内

早乙女「えーっ。一曲だけでクリスマスコンサートやるんですかあ？」

礼子「いやいや。あたしらの実力じゃ、一曲でも難しいくらいだよ。特にあんだ！」

ドアチャイムが鳴り、島村とボディガード二人が入店する。

奈緒「いらっしや！」

三人組の凶悪な雰囲気、霧に息を呑む。腕組みして待つ。島村、早乙女に近づく。ボディーガード二人、ドア付近で腕組みして待つ。島村、早乙女に近づく。案外、近くにも必ず探し出しますけどね。ま、地球の裏側に逃げて

早乙女「：に：逃げたわけじゃありません」

奈緒「（思い切って進み出る）ご、ご注文はッ？」

島村「（ジロリと睨む）じゃ、ビールを」

奈緒「び：ビールだなんて銘柄は、うちの店には置いてませんっ。ど、どのビールを飲みたいのか、分かりませんっ！」

島村「（奈緒を感心した顔で見る）なるほど。では、スピットファイアをポイントで」

奈緒「えっ：え、ええと：（礼子に助けを求め顔）」

礼子「申し訳ございません。あいにく在庫がないので、代わりにボディントン・パブ・エールはいかがですか？」

島村「：いい店じゃねえか」

佐原「ありがとうございます。でも、（ボディ
ーガード二人を示し）お連れの方とご
一緒なら、奥のテーブル席はいかがです
か？」

早乙女「：すみません！」

早乙女、急に立ち上がりドアへ走る。
島村「待て！」

ボディーガード二人が早乙女に襲いか
かる。伊集院が素早く立ち、ボディー
ガードAを羽交い締めにする。ボディ
ーガードB、早乙女を捕まえようとす
る。早乙女、方向を変えて店の奥へ戻
つて来る。追いかけるボディーガード
Bの前に立ちふさがる佐原。ボディ
ーガードB、佐原に殴りかかる。佐原、
電光石火の早業でボディーガードBの
関節をキメて動けなくする。
一同、おおっと驚きどよめく。
中田、愉快そうに佐原を見る。

中田「さすがです、師匠」

伊集院「刑法第三十六条。まあ、ギリギリ正当防衛ってところかな」

島村「なんですか、あなた達。邪魔をしないで下さいよ」

礼子「（伊集院を指差して）この人、元刑事さんだから。（佐原を指差して）こっちは：えっと。牧師でマスターで：」

伊集院「お前ら、どこの組のモンだ？ 暴対法適用してやろうか、おい！」

島村「ち、違います！ わ、私ら一般市民です。この格好は、ちよつとした趣味です。：」

伊集院「趣味、ねえ」

礼子「あたしは理解できるわ」

島村「（ボディガード二人を指して）こいつらは、うちの社員で、秘書と運転手です。全員、前科はありません。刺青も入れてませんっ！」

島村とボディガード二人、慌てて肌

を見せようとする。

伊集院「分かった。見せんでいい！」

島村「（早乙女を冷たく睨む）：どこにいても、あなたの罪は消えないですからね。忘れないで下さいよ」

島村、ボディガード二人を促し、立ち去る。乱暴にドアが閉められる。

奈緒「あいつら、何者なんですか？」

早乙女「昔、高校で教師をしていた頃の：教

え子の父親だ」

奈緒「あつ：（口に手を当てる）」

伊集院「奈緒ちゃんも事情を知ってるのか」

礼子「この子、自分で調べたのよ」

早乙女「あの人の言う通り、僕の罪は一生消えない。忘れるわけがない：」

奈緒「でも、あいつら何しに来たんですか？

何が目的なの？」

伊集院「嫌がらせだろう。娘が妻子持ちの教師に騙され傷ついて、高校を中退した挙句、今でもずっと引きこもってるそうじ

やないか。『ずっと貴様を見てるぞ。許さないぞ』ってメッセージだろう」

奈緒「でも、シンさんを誘拐しようとしませんでしたよね？」

伊集院「本気じゃなくポーズだろ。一流企業の社長がそこまでやらないよ」

礼子「どうして一流企業の社長だって分かるの？」

伊集院「スーツの襟元に社名入りのピンバッジがあっただろ。それに出て行く時、ボディ―ガードの一人が小声で『すみません社長』って言うてるのが聞こえたよ」

礼子「さすが」

伊集院「いてて：（腰をさする）」

奈緒「あく惜しいなあ」

伊集院「俺も歳だな」

奈緒「でも格好良かったですよ。あっ、マスク―も！」

佐原、慌てて奥へ引っ込み姿を消す。

奈緒「照れ臭いのかな？」

礼子「マスタ―って時々、只者じゃない動きをするわよね」

中田「やっぱ師匠、さすがです」

佐原、カウンター奥で頭を抱えている。

佐原「（小声で）しまった〜：」

奈緒「でもさあ、本当にシンさんが悪いと思うわよ。教え子に手を出すなんてサイテ―。しかも不倫だなんて」

早乙女「それでも僕は本気だったんだ。そして彼女も：」

伊集院「これからどうするんだ？　また誰も

知らない土地へ移ってやり直すのか？」

早乙女「いいえ。もう逃げないことにしました。それに：ここが気に入ってますから。でも、皆さんに迷惑が掛からないようにします」

○喫茶クルス（夜）・二階の廊下

佐原、奈緒、礼子が互いに「おやすみなさい」と声を掛け合う。佐原、入室。

礼子「今日は、あんたの部屋でいい？」

奈緒「えっ。片付いてないですよ（慌てる）」
○奈緒の部屋（夜）

部屋のものが乱雑に散らかっている。

礼子「片付いてないにも程があるわね」

奈緒「だから言ったじゃないですかあ。私の場合、社交辞令とか謙遜じゃなくて本当に片付いてないですからねっ！」

奈緒と礼子、各々自分のグラスに瓶ビールを注ぐ。

礼子「（菓子袋を開けながら）あんたの詮索好きがうつつたわけじゃないけど、今日のマスター凄かったね。やっぱり『何者？』って思うわよね」

奈緒「でしょ！ マスターって謎が多いですよね。海外特派員だったことは分かったけど、他にも何かワケがありそう……」

礼子「敬語はもういいよ。ため口でいいから」
奈緒「あっそう。分かった」

礼子「……切り替え早いな」

奈緒「実はタツさんの事も気になって調べた

のよね。元刑事だから何か有名な事件でも解決してないかなって：」

礼子「名探偵じゃないんだから」

奈緒「そしたら：こんなの見つけちゃった」

奈緒、スマホの画面を礼子に見せる。

奈緒「あーあ。調べなきゃ良かったかなあ」

礼子「それも知ってる：みんな知ってるけど

口にしないから、奈緒も黙っててね」

奈緒「ナオ？：やった〜呼び捨てに昇格！」

礼子「変な子」

奈緒と礼子、ビールを飲み菓子を食べる。床に置いたスマホの画面にニュース記事「県警の刑事が被疑者を暴行。調書の捏造も」。伊集院の顔写真。

○長崎の風景（朝）

長崎港。鳥のさえずり。汽笛の音。坂道。教会。喫茶クルスの外観。

○喫茶クルス（朝）・店内

伊集院、店に入って来る。

伊集院「おはよう」

礼子「いらっしやい」

奈緒「あゝいらっしやいませ（ぎこちない）」

伊集院「ん？（奈緒の態度に気付くが、新聞を広げて読み始める）」

礼子「今日も朝はカフェオレでいい？」

伊集院「ああ。まだシンさんは来てない？」

礼子「いつもは早いのにねえ」

佐原「そういえば、今日は少し出かけるから来れないって言ってましたよ」

伊集院「あ、そう」

○福岡県久留米市内（朝）

車を運転する早乙女。豪邸の前で停車。

早乙女、豪邸の玄関先を見ている。表

札に「島村」の文字。門が開き、黒塗

りの高級車が出て行こうとする。

早乙女、自分の車を降り、高級車の前

で立ちふさがる。高級車が急停止。後

部座席の窓が下りて島村が顔を出す。

ボディーガード二人が駆け付け、早乙

女の両脇に立つ。

島村「何の用だ？」

早乙女「里香さんに：お嬢さんに会わせて下さい」

島村「：どうして？」

早乙女「謝りたいんです。一言、謝りたいんです」

島村「謝るような事をしたと認めるんだな？」

早乙女「本気で愛していました。今でも同じです。でも、あの頃の事情が許さなかつた。：そのことで里香さんを傷つけてしまった。：まいったことに謝りたいんです」

島村「謝ってどうなる。貴様の気が晴れるだけじゃないのか。娘は家から一步も出られなくなるほど傷ついたんだぞ。貴様の顔を見たら傷がまた深まるだけだ。余計なことをするな！」

早乙女、黙って深々と頭を下げる。

島村「それに、何だそのふざけた格好は。本当に誠意を見せたいならマトモな格好で来い」

車窓が閉じられ、発進。

早乙女、車を追いかけてようとするがボ
ディガード二人に遮られる。

豪邸の二階の窓から島村里香（23）

がじっと見ている。佐原と里香、見つ
め合う。早乙女、深々と頭を下げる。
再び顔を上げると、窓から里香の姿は
消えている。

○長崎の風景（夕）

長崎港。教会が夕陽に染まる。

○喫茶クルス（夕）・外

伊集院、喫茶クルスの看板を裏返して
いる。そこへ早乙女が現れる。

伊集院「今日は来ないんじゃないのか？

お陰で俺がやってるよ（看板を指さす）」

早乙女「予定通りにいなくて：」

早乙女と伊集院、店に入る。

○喫茶クルス（夕）・店内

礼子「あらシンちゃん：（優しい声で）おか
えり」

奈緒「結局、今日も来るんじゃない。でも：
（優しい声で）おかえり」

佐原「おかえり」

聖月「おかえりなさい」

早乙女「感極まつて、手で目を覆う。

伊集院「おいおい、何を泣いてんだよ」

中田「：（もらい泣きしている）」

礼子「お前もかよっ」

奈緒「さあ、オトナの時間ですよ」

奈緒、早乙女にハンカチを差し出す。

早乙女「今日は優しいんだね：」

奈緒「こらっ、鼻水を拭くなっ！」

ドアチャイムが鳴る。

奈緒・礼子「いらっしやいませー」

島村里香が入って来る。絶句する早乙

女。里香が早乙女の前に来る。何も言

えず見つめ合う早乙女と里香。

佐原「お嬢さん、どうぞお掛け下さい」

里香、早乙女の隣のカウンターに座る。

里香「その帽子、まだ持っていたんですね」

早乙女「（パナマ帽を手）大切な物だから」
里香「うちまで来て下さってありがとう：父
が大変失礼しました（頭を下げる）」

早乙女「何を言われても何をされても仕方が
ないですから、僕は」

里香「でも先生は私のこと心配して来て下さ
ったんでしょ。私はもう：大丈夫」

店内の一同、聞き耳を立てて二人の会
話を聞いている。

早乙女「でも僕は、君をひどく傷つけてしま
った。取り返しのつかない間違いを：」

里香「私を好きになつたのが間違いだったん
ですか？」

早乙女「違う！　君を愛したのは決して間違
いなんかじゃない。間違っていたのは、
それ以外の全ての事だ」

里香「だったら：だから、もういいんです。
本当に：ありがとう先生。楽しかったで

す。私はもう大丈夫（微笑む）」

早乙女「いや、僕はまだ：」

里香「さようなら先生」

里香、席を立つ。佐原に会釈し、店を出る。早乙女、パナマ帽を目深にかぶり直し顔を見られないよう正面を向く。

奈緒「シンさん：？」

早乙女「僕は本当に、何もかも捨てても良かったんだ：」

○教会・外

前庭に枯れ葉が落ちていく。礼拝堂の中から合唱の声。

○教会・中

佐原「まだまだですね。大二郎君、元コーラス部なんですよ。しっかり歌って下さい。礼子さんも周りが下手だからって気を抜かないで。はい、もう一度！」

佐原の指揮で合唱の練習が続く。

○教会・外

坂道を上がって来る怪しい雰囲気の外国人（クリスティアン）。教会の中から合唱の練習を終えた人々がゾロゾロ

出てくる。

中田「参ったなく。合唱の練習になると、マスター、人が変わっちゃうんだから」

奈緒「ああ：いつもの優しいマスターはどこに?!」

伊集院「ん？（教会を見ているクリステイア
ンに気付く）」

早乙女「誰？」

礼子「いかにも怪しい人よね」

一同、不審に思いつつも、喫茶クルス
に入っていく。

○喫茶クルス・店内

佐原「みなさん、お疲れ様でした」

奈緒「やだマスター、さっきと同一人物とは思えない」

中田「マスターすみません。僕、学生時代に
コーラス部だったというのは嘘です。本

当は帰宅部です」

礼子「あれっ。こないだはサッカー部って言
ってなかった？」

聖月「（テーブル席が他の客で埋まっているのを見て）今日はここでもいいですか？

（カウンター席を指す）

佐原「もちろん」

ドアチャイムが鳴り、クリステイアンが入って来る。

奈緒「いらっしゃ」

佐原「クリステイアン?!」

クリス「（一番近いカウンター席に座る）

*It's been a long time since
I saw you...*

（字幕）「しばらくぶりだな」

佐原「*No one sent for you!*」

（字幕）「お前に用はない！」

クリス「*Parlions en français,
puis que il s nous eccontent.*」

（字幕）「フラン語で話そう。彼らが聞いているから」

佐原とクリステイアン、小声で何かを話し始める。

奈緒「えっ何、何？：何語?!」

礼子「最初は英語よね。途中から多分フランス語じゃないかしら？」

早乙女と中田、興味津々の様子。

クリス「(機嫌よく) Au revoir. Adieu!

(字幕)「それじゃあ、またな！」

佐原「(ぶっきらぼうに) Adieu, bon ami」

(字幕)「あばよ、友よ」

クリスティアン、鼻歌を口ずさみながら店を出る。

奈緒「マスターすごい！　今の人、お友達ですか？　何語ですか？　どうして喋れるんですか？　マスター、何か国語喋れるんですか？」

礼子「おいおい、質問が多すぎるよ！」

佐原「古い友人です。フランス語です。長い間、外国に住んでましたから。五か国語くらいですね」

礼子「すごい：全部答えてる」

奈緒「あっそうか。マスターって昔、特派員

だったんですよね？」

佐原「大昔の話ですよ」

聖月、不安そうな顔で佐原を見ている。

○喫茶クルス（夜）・店内

店内がバー仕様になっている。

佐原「悪いけど、ちよつと出かけてきますね」

奈緒「いつてらっしゃい」

礼子「気をつけて」

佐原、出ていく。

早乙女「この時間まで聖月ちゃんがいるって

珍しいね。ついに不良になっちゃったか

な？」

聖月「あのう：皆さんに、ご相談があるんで

すけど、いいですか？」

礼子「もちろんよ。何？」

奈緒「恋愛相談は勘弁してね：」

奈緒、礼子、早乙女、伊集院、中田、

聖月がテーブル席に集まる。

聖月「私、すごく耳がいいんです。だから聞こえちゃって」

礼子「ああ：昼間の『謎の外国人』でしょ。マスターがクリスティアンって呼んでたけど：二人の会話が聞こえたのね？」

奈緒「でも英語とフランス語でしょ。あ：聖月ちゃんも分かるの？」

聖月、頷く。

礼子「一人で抱え込んじゃダメ。気になることがあるんだったら話して」

聖月「はい。：最初は私の語学力が未熟だから聞き間違えたのだろうって考えたんですけど。いえ、そう思ったのかもしれない。でも：あのクリスティアンって人、武器商人だと思うんです。マスターに、ライフルか何か武器を売ろうとしてました」

一同「ええーっ！」

伊集院「武器商人の名前がクリスチャンとは、ふざけた野郎だな」

奈緒「えっ…そこ？」

早乙女「クリスチャンじゃなくてクリステイアンね。横文字に弱いんだから。」

礼子「それで、マスターは？」

聖月「もちろん、マスターは断ってました。でもクリステイアンさんは、しつこくマスターに何かを売ろうとしてました。それと…（言いよどむ）」

礼子「何？ 気になることがあるなら話して」

聖月「これも私の聞き間違いだと思いたいんですけど…マスターのことを『伝説のスナイパー』だとか言っていました。『同じ傭兵仲間なんだから安くしておくぜ』みたいなことも。」

一同「…」

伊集院「マスター、傭兵だったんだ」

奈緒「マスターの名前は悟（さとる）でしょ。

ヨーヘイじゃないわよ」

礼子「そっちなじゃなくて！ 戦争屋って意味の傭兵よ」

早乙女「フランス外人部隊とかグリーンベレ
ーとかの？」

礼子「んー。よく分かんないけど、多分それ」

早乙女「マスターって『戦争の犬たち』だっ
たのか？」

奈緒「何ソレ？」

早乙女「昔の映画だよ。フレデリック・フォ
ーサイスの原作で。知らないか？」

中田「どおりで。あの身のこなし…只者じゃ
ないと思つてたけど」

礼子「でもさ。断つたんでしょ。だったら良

いんじゃない？ ねえタツさん、マスタ

ーは何の罪にもならないわよね？」

伊集院「あ…ああ。断つていれば、だけどな」

○奈緒の部屋（夜）

窓から月が見える。

奈緒と礼子、盃で日本酒を飲んでいる。
奈緒「なんで今日も私の部屋？ なんか最近、

私の部屋で飲むの多くないですかあ？」

礼子「（するめをライターで炙る）嫌なの？」

奈緒「じゃないけど。一応、人様が来るから片付けなきゃなんないし……」

礼子「だから良いんじゃない。あんた、人が来ないとゴミ屋敷になっちゃうでしょ」

奈緒「（お酒を一口飲む）あっ。これ美味しい！」

礼子「でしょ。これ、下手な吟醸酒より美味しいと思うよ。次はワイングラスで飲んでみよっか」

礼子、二人のワイングラスに酒を注ぐ。奈緒「うわあ。こっちの方が香りが立つわね」

礼子「なんで今までコレで飲まなかったんだろ……って思うよね」

奈緒「（ぐいっと一口飲む）それにしても、マスターの正体って一体……」

礼子「まあ人それぞれ意外な一面があるわよ」

奈緒「意外すぎでしょ！ 牧師なのに元戦争のプロって。ん？ マスターって元特派員じゃなかったっけ？ ……あれっ？」

礼子「何かワケがありそうね。でも……これ以

上、詮索しない方がいいんじゃない？」

奈緒「スマホをいじって調べ始める。

礼子「おいつ。人の話、聞いてないな。」

奈緒「やっぱり、そこまでは分からないか。」

本人に聞くのもナンだし：奥さんが外国で亡くなってることと何か関係があるのかなあ？」

○佐原の部屋（夜）

佐原、窓辺でウイスキーを飲みながら夜空を見ている。サイドテーブルに美佐子の写真立て。

（回想はじめ）中東の国

佐原と美佐子、織物や雑貨の露天商が並ぶ通りを歩いている。

佐原「こんな地球の果てまで美佐ちゃんを連れて来てホントに良かったのかなあ。二人分の大事な体なのに。」

美佐子「こっちの産婦人科は設備も整ってるから大丈夫よ。こんな素敵な国、やっぱり一緒に来て正解だったわ。それに、サ

トル君、私がいないと淋しくて眠れない
くせに」

佐原「うーん：ここだと日本語が通じないか
ら、こんな会話をしても恥ずかしくな
いなあ」

佐原と美佐子、笑う。ふと、アクセサ
リ―を売る露天商の前で立ち止まる。

美佐子「あら。これ綺麗！」

美佐子、三日月型のネックレスを指す。

佐原「美佐ちゃんの方が綺麗だよ！」

美佐子「もう。外国だからって調子に乗りす

ぎよ！」

露天商「いらっしやい。安くしとくよ」

美佐子「日本語、分かるの?!」

露天商「はい。昔、日本に留学してました」

佐原、顔を真っ赤にして横を向く。

美佐子、佐原を見て笑う。

（回想終わり）佐原の部屋

佐原、三日月型のネックレスを手のひ
らに置いて眺める。窓から月が見える。

○長崎の風景

路面電車が走る市内。山村と久実、路面電車から降りる。

○坂道の下ソフトクリーム屋

山村と久実、テラスでソフトクリームを食べている。

久実「素敵なお店ね。海の風も気持ちいいわ」
山村「出島はここから近いのかな。オランダ坂とグラバー邸は前回行ったけど、もう一度行くかい？」

聖月「（息を切らして）すみません、ゼミが長引いちゃって：お久しぶりです」

山村「やあ。元気そうだね、聖月ちゃん」
久実「付き合わせてごめんなさいね。お勉強が忙しい時期じゃないの？ 観光案内な

んかお願いして良かったのかしら？」
聖月「大丈夫です。医師国家試験は再来年ですし。それに、地元に住んでると意外と観光地って行かないから、むしろ新鮮で

楽しいです」

久実「そう言ってもらえると嬉しいわ」

山村「じゃあ、行こうか」

聖月、山村、久実、坂道を上り始める。

久実、杖を頼りに歩く。山村、久実を横から優しく補助する。

○喫茶クルス・店内

ドアチャイムが鳴り、早乙女が入る。

奈緒「いらっしやーい」

早乙女「あれ。今日はまた、一段と客が少ないね」

礼子「余計なお世話よ」

伊集院「お前さんが来ると十人分ぐらい騒々

しくなるけどな」

早乙女「聖月ちゃんもいないの？」

奈緒「今日は、ほら、夏にここで知り合ったご夫婦：山村さん達を市内観光に案内してあげるんだって」

礼子「ずいぶん仲良くなったわね」

早乙女「本当の親子みたいに聖月ちゃんを可

愛がってるよね。亡くなった娘さんにそ
っくりなんでしょ？」

佐原「おや：噂の主がいらっしやいましたよ」
ドアチャイムが鳴り、聖月、山村、久
実が入る。

奈緒「おかえりー聖月ちゃん。山村さんもお
久しぶりです」

久実「また来ちゃいました」

聖月、山村、久実、同じテーブルへ。

山村「皆さん、ご無沙汰しております」

久実「聖月ちゃんには、すっかりお世話にな
っちゃったわ」

聖月「そういえば、お昼、まだでしたよね。

何か食べたいものありますか？」

山村「前回ここで美味しいちゃんぽんを頂き
ましたね。家内と話してたんですが、次
はぜひ、名物の皿うどんを食べてみたい
なと：」

佐原「ではまた『呑気屋』に注文しましょう」

山村「お言葉に甘えて、お願いします」

礼子「他にも食べたい人は？」

全員、「はい」と手を挙げる。

○喫茶クルス・外

出前のバイクが店の前で停車する。

○喫茶クルス・店内

ドアチャイムが鳴る。中田、岡持ちを
持って入る。

中田「まいどー。お待たせいっ」

奈緒「だんだん板についてきたねえ」

中田、大皿の皿うどんをテーブルに置
く。奈緒と礼子、小皿と割り箸を皆に

配る。山村と久実、不思議そうに見る。

佐原「長崎の出前の皿うどんは、大皿を皆で

取り分けて食べるんです」

礼子「これも欠かせないわね。(小瓶を手に
取る)皿うどんにソースはマストでしょ」

奈緒「でも、なんでいつもソースが小っちゃ
な瓶に入ってるんでしょうねえ」

伊集院「それが長崎の伝統なんだよ。俺が子
供の頃からずっと変わらないな」

皆、自分の皿うどんにソースをかける。

礼子「長崎の『あるある』だよな」

佐原「（山村夫妻に）すっかり長崎が気に入っていただいたようですね」

山村「今回も短い旅行ですが、また次はクリスマスイブに来ようと思ってるんです」

久実「次で最後になるかもしれませんが……」

久実、はっとして口をつぐむ。

山村、窘める顔で久実を見る。

佐原、その様子を見て何か気付いた顔。

中田「やっぱ美味しいな……。僕の店」

奈緒「なんで大ちゃんも食べてんのよ」

礼子「『僕の店』じゃないでしょ。アルバイトのくせに」

早乙女「仕事じゃないの？」

中田「みんな冷たいな」

中田のスマ木の着信音が鳴る。

中田「あっ、やべっ。まいどあり」

中田、慌てて店を出る。

佐原「（山村夫妻に）実は私達、合唱団をや

ってるんですよ。まだお披露目したことはない素人ばかりですが、イブに間に合うように猛特訓しますから、楽しみにしてて下さい」

礼子「猛：特：訓?!」

早乙女「（悲鳴）ひいっ！ 無理無理ムリムリ！」

礼子「マスター。無理です」

佐原「そうかなあ」

○喫茶クルス・外
タクシーが店の前で停まる。

○喫茶クルス・店内
佐原「あ。タクシーが来たようです」

山村「皆さん、またクリスマススイブにお会いしましょう」

久実「すっかり長居してすみませんね。また会える日を楽しみにしてます」

佐原「そこまでお送りします」

聖月「私、空港までお見送りしますね」

○喫茶クルス・外

山村と久実、タクシーに乗る。

佐原「聖月ちゃん、お見送りが終わったら、
また戻って来れる？」

聖月「え。はい、いいですよ」

聖月、タクシーに乗る。

佐原、三人を乗せたタクシーを見送る。

○喫茶クルス（夜）・店内

ドアチャイムが鳴り、聖月が入る。

聖月「お見送りして来ました。山村さん、皆

さんにすごく感謝してましたよ」

佐原「聖月ちゃん、ちよつとこっちへ。みんな

も集まって下さいますか？」

奈緒、礼子、早乙女、伊集院、中田、

何事だろうという顔で集まる。

○教会（夜）・外

星がきらめく夜空。教会のシルエット。

○喫茶クルス（夜）・店内

早乙女「えーっ！ 管弦楽コンサート?!」

礼子「合唱をやるんじゃないんですか？」

佐原「どう考えても合唱は間に合いそうにな

いからねえ。それに：（聖月を見る）

聖月「実は、山村さんご夫婦の娘さん、クリスマススイブの夜に亡くなったんです」

伊集院「命日か：」

聖月「娘さんは音大でチェロを専攻してたそうですね。初めてのコンサートがイブの日
に開かれることになって：」

○（回想はじめ）夜の街

コンサート会場の看板。山村みゆき（25）がチェロと共に佇む写真と「山村みゆきクリスマス・リサイタル」

の文字。

みゆき、雑踏をかき分けて急ぐ。

聖月（声）「娘さん：みゆきさんは、ご両親へのクリスマスプレゼントの買い物で遅くなり、コンサート会場へ急いでいたそうですね」

青信号が点滅する横断歩道。みゆき、一瞬迷うが走り出す。車のブレーキ音。迫るトラック。眩しいヘッドライト。

〇（回想終わり）

聖月「奥様がいつも身に着けているブローチ、あれがクリスマスマズプレゼントだったそうです」

一同、静まり返る。

佐原「皆さんに折り入ってお願いがあります。ご協力いただけますか？」

礼子「何？ 改まって……」

早乙女「マスターの頼みなら仕方がないな」

伊集院「何じゃろ？ 老いぼれでもできることかな？（わざとらしく咳き込む）」

早乙女「急に老人ぶらないでよ」

佐原「誰か：楽器を弾ける人、いませんか？

できればチエロがいいのですが……」

早乙女「この中に、そんな特技を持つてる奴、いないんじゃない？」

礼子、気まずそうに視線を逸らす。

伊集院「礼子ちゃん、ひよつとして何か出来

るんじゃない？ 何か隠してるでしょ」

礼子「これだからやなのよく。元刑事は」

早乙女「で。何を隠してるのかな。礼子さん」
礼子「(ため息) 弾けます。バイオリンなら」
奈緒「えー、すごい礼子さん。知らなかった」
佐原「不躰な質問ですみませんが、どれくらい弾けますか？」
礼子「一応、人並みには。音大出てますし、いくつか賞もいただいていますから：」
奈緒「『人並み』以上じゃないですか！」
早乙女「この場合、『以上』と言うのは人並みも含むから正しい日本語じゃないな」
奈緒「(早乙女を無視して) 礼子さんスゴイ。いいなく、特技を持ってる人って」
佐原「あとはチェロか。：聖月ちゃん、本当に無理なお願いで申し訳ないんだけど」
聖月「はい？」
佐原「今からチェロを練習してくれますか？」
聖月「私ですか?! 今まで何も楽器を習ったことないですけど：私で良いんですか？」
佐原「この大役は、君でないとダメなんです。今から頑張ってイブまでに弾けるように」

：自信ないかな？」

聖月「いえ！：やってみます！」

佐原「残るはピアノか：。誰か弾ける人？」

沈黙する一同。

佐原「仕方がないですね。では私がやりましよう。礼子さん、聖月ちゃん、明日から頑張りましようね」

礼子「あたし、まだ『やる』って言ってないですけど：」

早乙女「（中田に）おい、何泣いてんだよ」

中田「マスターが何をやるうとしているか、分かっちゃったんだよお」

伊集院「一大プロジェクトになりそうだな。

それにしても指名されなくて助かったよ。俺、音楽の成績はいつもアヒルの行列だったからなあ」

奈緒「アヒルの行列って？」

伊集院「数字の2が並んでるってこと」

早乙女「俺なんて、煙突が並んでたもんね」

礼子「数字の1か：」

伊集院「俺よりヒドイな」

奈緒「それにしてもマスターがピアノ弾けるって知りませんでした！」

佐原「いいえ。弾いたことありませんよ」

一同「：ええーっ！」

○礼子の部屋（夜）

奈緒と礼子、女子会の準備をしている。

聖月、部屋に入ってきて来る。

聖月「お邪魔します。礼子さんの部屋、初めて！」

礼子「ようこそ、わが城へ」

奈緒「あたしの部屋でも良かったんだけどね。

ほら、今、たまたま散らかっててね」

礼子「たまたま、ねえ！」

奈緒「（慌てて話題を変える）礼子さんがバイオリン弾けるなんて知らなかったなあ」

聖月「えっ。（礼子に）話してなかったんで
すか？ 礼子さんも音大出身で、バイオ

リンを専攻してたんですよ」

奈緒「えーっ。初耳だーっ！」

礼子「そりゃあ：言わなかったからよ」

聖月「あ：ごめんなさい」

奈緒「（拗ねる口調）なんか、言いにくい理由でもあったんですかあ？」

礼子「いや。あたしの問題だから」

奈緒「聖月ちゃんは知ってたけど、私には言えないんですね。はい、分かりました」

礼子「もう：しようがないな。分かったよ。

話すけどさ：あんまり面白い話じゃないからね」

奈緒「面白そう。ワクワクですう♪」

礼子、呆れた顔でため息をつき、部屋の隅に埋もれていた埃まみれのバイオリンケースを取り出す。

礼子「これを再び開ける日が来るとはなあ：」

礼子、ケースの蓋を開け、バイオリンを取り出し、複雑な表情で眺める。

聖月「うわあ：。これ、すごく高いモデルですよね？」

礼子「実家には、もっと凄いのがあったけど

ね……」

奈緒「お嬢様だったんだ。人は見かけに……」
礼子「殴るよ」

奈緒、スマホで何かを調べ始める。

聖月「……？」

礼子「あつ。馬鹿！ やめてよ！」

奈緒「へへくん。見つけちゃった。天才バイオリニスト椎名礼子の輝かしい経歴。すごいじゃん。このコンクールって超有名なやつじゃないですか？」

礼子「過去の栄光よ。所詮、実力が伴わなかっただけ。よくある話よ……」

奈緒「なんか、勿体ないなく。続ければ良かったのに」

礼子「……あ。（試し弾きをして）このバイオリン、やっぱりもう駄目だわ。いい口実が出来たから、断っちゃおう。聖月ちゃん、チエロがんばってね」

奈緒「ちよつと待ってよ。さっき『実家にもっと凄いバイオリンがある』って言って

たじゃない。そのバイオリンを実家から送ってもらったら？」

礼子「とつくの昔に母が捨ててるはずよ。いや、高値で売り払ってるかもね」

奈緒「えっ。どういうこと？」

礼子「……」

聖月「（礼子に）私から説明しましょうか？」

礼子、諦めたように「どうぞ」の仕草。

聖月「礼子さん、音大に入学する時と、音大を辞めた時に、お母さんと大喧嘩したそうなんです：ですよね？」

礼子、頷く。

聖月「特に、音大を辞めた時は大変だったそうです。それ以来、親子の縁を切つて一度も会っていないそうなんです」

礼子「ありがと聖月ちゃん。もう口にしたくない話題だから助かるわ」

○（回想はじめ）礼子の実家

礼子と椎名真理（55）が口論。

真理「礼子ちゃん、世の中そんなに甘くない

のよ。バイオリンで食べていくなんて、そんなこと……」

礼子「何よ、『食べていく食べていく』って、いつもいつも！人は食べるためだけに生きるんじゃないでしょ。そんな下品な言葉で現実主義者ぶらないでよ」

真理「私は娘に苦勞をさせたくないだけなの」
礼子「苦勞のない人生なんてないわよ。だったら、好きな苦勞を選ばせてよ！」

○（回想・別場面）礼子の実家

礼子、暗い部屋で膝を抱えている。

真理「礼子ちゃん、本当なの？あれだけ私に啖呵を切って入学したのに、もう諦めるの？」

礼子「……」

真理「あなたの覚悟は、その程度だったの？もつと自分に自信を持ちなさい！」

礼子「……」

真理「入学費や月謝だって、決して安くはなかつたんだから。もう一度……」

礼子「（立ち上がる）うるさい、うるさい！」

礼子、真理にぬいぐるみやクッション等を手当たり次第に投げつける。

礼子「学費なんか、一生かけて返してやるわよ！ …… 今まで大変お世話になりましたっ！」

礼子、鞆に身の回り品を詰め込み、勢い良く部屋を出ていく。

真理、オロオロして何も出来ない。

真理「礼子ちゃん：礼子ちゃん：」

○（回想終わり）

奈緒「（腕組みする）うくん……」

礼子「何よお」

奈緒「やつぱり良くないよ。親子なんだからさ。いつかは会えなくなっちゃう日が来るんだからね。後悔しないように……」

礼子「気持ちは嬉しいけど、そういう美しい話は世間の家族全てに当てはまるわけじゃないのよ。『親子だから』『血が繋がってるから』って、それがそんなに重要な

こととは思えないのよね。以上、おわり！」

奈緒「こりゃ手強いわ……」

聖月「礼子さんの言うこと、少し分かる気がします。私も、家族を大切にとか家族の絆だとか、あまりピンとこないんです。結局、自分のDNAに近い人間だけを優先する動物的本能じゃないですか。家族愛と言えば聞こえが良いけど、生物学的に見れば生き残りゲームのためのエゴでしよ……。私はむしろ、マスターの言うてた人間愛の話の方が心に響くんです」

○（回想はじめ）教会・中

佐原、説教壇で説教している。

佐原「これはキリストさんじゃなく、私の妻が言ってた話なんですけどね。例えば、子供が二人、目の前で死にかけているとします。一人は自分の子供。もう一人は見ず知らずの他人の子供です。あなたの手には命を救う薬があります。ただし一

人分だけ。さて、あなたはどっちの子供に薬を与えますか？大抵の人は自分の子供を助けると答えるでしょうね。でも、妻の答えは違っていました。見ず知らずの子供の方を助けると言うんです。この時、私は妻の気持ちが分かりませんでした。た。どうして自分の子供じゃないの？つて。でも、今はこう思うんです。人は皆、家族だと。妻が言いたかったことは、今となっては知りようがありません。でも、その答えを見つげるために私は牧師になつたのかもしれないね……」

（回想終わり）

奈緒「そういうえば、聖月ちゃんのご両親って、どういう人？一緒に住んでるの？」

礼子「ちよつと。プライバシーに踏み込み過ぎよ。でも聖月ちゃんってミステリアスよね。そういうえば苗字も知らないし」

聖月「……せっかくの女子会なんだから、恋バナしまししょうよ」

奈緒「いいねー！と聞いたところだけど。

私、暫くは恋なんて：遠慮するわ」

礼子「私も『報われない恋愛』体質だから、そのテーマは、ちよつとキツイな」

奈緒「今も報われない恋の現在進行形だったりして？ 相手は誰よ。タツさん？：歳の差ありすぎか。シンちゃん：絶対ないわね。まさか、マスター？」

礼子「：：」

奈緒「マジっすか?!」

礼子「言い出しっぺの聖月ちゃんはどうか？ 付き合ってる人とか好きな人はいないの？」

聖月「残念ながら全然です。学部にも、こちらにも。それに今は試験に向けて集中しなくちゃだから：勉強第一です！」

奈緒「お医者さんになる試験だよね。頑張つてね。あっ：」

奈緒、聖月の髪の毛の赤いリボンに気付く。白い水玉模様の入った赤いリボン。

奈緒「そのリボン、可愛い！」

聖月「ありがとうございます」

礼子「司法試験も受けるって言ってたよね？」

聖月「ああ。はい、受かりました」

奈緒・礼子「ええーっ！」

奈緒「それはそれは：恋愛したくても周囲の

男が馬鹿に見えるでしょ？ 可哀想く」

礼子「大二郎なんて、一番歳が近いけど一番

アホっぽいから絶対『ナシ』だろうね」

奈緒・礼子・聖月「あはははは：」

○中華飯店「呑気屋」(夜)・店内

中田、店内の掃除をしながら、大きな
くしゃみをする。

呑気屋の店主(声)「中田君、もういいよ」

中田「はい。お疲れ様でした」

○中華飯店「呑気屋」(夜)・外

中田、店の外に出て、夜空を見上げる。
視線の先に、教会の鐘が見える。

○JR長崎駅

改札口の近くで佇む奈緒。改札口から

真理が出てくる。二人、笑顔で近づく。

奈緒「礼子さんのお母さん……ですよね？」

真理「あなたが奈緒さんね？　ありがとうございます……」

○喫茶クルス・店内

ドアチャイムが鳴り、聖月が入店。

礼子「いらっしや……あ、聖月ちゃん」

聖月「礼子さん、昨夜はありがとうございました」

した。ごちそうさまでした。あれっ。奈

緒さんは？」

礼子「誰かと約束みたいで出かけてるわよ。

でも、もうすぐ帰って来るかな」

聖月「（カウンター席に座る）今日はシンさ

んもないんですね」

礼子「シンちゃんは法事で檀家回り。珍しく

仕事してるわ」

ドアチャイムが鳴る。奈緒、入店する。

礼子「五分の遅刻ね。給料から引いとく……」

ドアチャイムが鳴る。真理、入店する。

真理「礼子ちゃん、ここにいたのね。元気？」

礼子「なんでママがここに……（奈緒を睨む）」

あなたね！」

奈緒「着替えてきまーす（二階へ行く）」

礼子「（真理に）何の用？」

佐原「礼子さん、お客様に失礼ですよ」

真理、カウンター席に座る。

礼子「ご注文は？」

礼子、コップの水を乱暴に置く。

佐原「礼子さん！」

真理「（佐原に）いいんです：これを届けに

来ただけですから」

真理、持っていた風呂敷包みを解き、

中からバイオリンケースを取り出す。

礼子、驚いた顔で見つめる。

真理「礼子ちゃん、これが必要なのよね。で

は、失礼します。お騒がせしました。礼

子ちゃん、あなた体が弱いんだから無理

しちゃダメよ。皆さんと仲良くね」

真理、深くお辞儀をして、店を出る。

佐原「礼子さん：奈緒さんが戻ったから、代わり休憩に入っていていいですよ」

礼子「いいえ。結構です」

聖月「礼子さん：」

奈緒、二階から降りてくる。

奈緒「あれっ。もう、お母さん帰ったの？」

礼子、カウンターに置かれたバイオリンケースを凝視している。

奈緒「：何やってんのよ。早く追いかけなさいよ。お母さん、わざわざ届けてくれたのよ。せめて見送りぐらい：（涙ぐむ）あんななんか幸せなだからねっ。私のお母さんなんか小6の時に死んじゃったんだから。礼子さんのお母さん、まだ生きてるじゃない。『礼子ちゃん、礼子ちゃん』って、ずーっと心配してたわよ！」

礼子、バイオリンケースを開け、バイオリンを持ち、確かめる。

礼子「えっ：嘘でしょ?！」

奈緒「完璧でしょ？ お母さんがずっと大切に保管して下さったからよ。いつかまた弾く日が来ると信じてたんだって」

礼子「：うちの母、すごい方向音痴なのよ。
今日中に駅に着けるかなあ：」

奈緒「（優しく）お見送り、行つといいで」

佐原「礼子さん、有給休暇が残り過ぎてますよ。労働基準監督署に私が怒られるんだから、今日と明日は休みを取って下さい。

これは業務命令です！」

礼子「業務命令じゃあ：仕方ないですね：」

礼子、店を出る。奈緒、窓から様子を
見守る。

○喫茶クルス・外

礼子、真理に追いつく。真理、泣き崩れるように礼子に抱きつく。礼子、真理の肩を抱く。二人、坂道を下りる。

○喫茶クルス・店内

奈緒、窓辺で、そっと目尻を指で拭う。

○教会（朝）・中

佐原、指揮棒を振り、合唱団が練習中。

佐原「ストップ、ストップ。タツさん、シンさん：お二人は、必ず自主練習をしてて

下さい。今年無理かもしれませんが、来年のクリスマスには間に合わせましょうね。では、解散です」

合唱団の人々、教会を出ていく。

早乙女「俺って音痴なの？カラオケバーではモテモテなんだけどなあ」

伊集院「なんか悔しいな。上手になりたい」

奈緒「（二人の背後から現れる）聞いたよ」

早乙女「うわっ何だよ。びっくりした」

奈緒「上手になりたいんですよ。だったら、

こっさり特訓しましょうよ」

早乙女「でもなあ…できるかな」

奈緒「皆の足を引っ張りたくないでしょ。ク

リスマスまでに上達して、マスターを驚かせてやりましょうよ！」

伊集院「そうだな」

早乙女「よし。見返してやるぞ」

○長崎の風景

秋が深まる長崎港。坂道に木枯らしが吹く。

○喫茶クルス・店内

演奏の練習をする聖月（チエロ）、礼子（バイオリン）、佐原（ピアノ）。

○長崎の風景

雪が舞う長崎港。教会の屋根や鐘に雪。

○喫茶クルス・店内

奈緒、窓から外を見ている。

奈緒「長崎にも雪が降るんですね。南国だから降らないと思ってました」

佐原「こんな時期には珍しいですけどね」

奈緒「異常気象かしら？」

礼子「でも最近やたらと『異常気象』って言うってない？何かの陰謀みたい……」

伊集院「出たね。礼子ちゃんの陰謀説」

礼子「だってさあ……」

ドアチャイムが鳴る。早乙女が入店。

奈緒・礼子・伊集院、ニヤニヤする。

早乙女「うす寒いく。めつきり冬になっちゃったねえ。あれ……どうしたの？」

周囲の人々が含み笑いをしている。

早乙女「なんだよ。みんなで！」

早乙女、テーブル席にいる島村とボデーガード二人に気付く。

早乙女「うわーっ！」

島村「大丈夫ですか？」

早乙女「えっ？：ええーっ！何ですか一体?!」

島村「突然失礼しました。そして、これまでの非礼をお許しください」

早乙女「ど、どういうこと：ですか?!」

島村「折り入ってお願いがあつて参りました。娘の里香の事です。最近、様子がおかしくて：ほとんど食事もとらず、どんどんやせ細っているのです」

奈緒「羨ましい！」

礼子「しっ！」

島村「どうしたのかと尋ねましたら、どうやら原因はあなた様でした」

早乙女「いや、その話でしたら、もう：」

島村「いえ違うんです。誤解なさないで下さい。今回、娘が思い煩っているのは、

あなた様に裏切られたというのではなく、あなた様が本気で里香の事を想っていたこと、今でも想っていることを知って心打たれたからなのです。里香も同じ想いです。このままでは衰弱して死んでしまふのではと、気が気でなりません！」

島村、ハンカチで涙を拭う。ポディーガード二人も慌ててハンカチを取り出し目元に当てる。

島村「かくなる上は：もう結婚しかありませんな！　どうか娘を救って下さい！」

島村、深々と頭を下げる。

早乙女「えっ？　はい？　：えっえっ？」

島村「それとも：（鋭い眼光）もう既に、他の女性と深い関係に？（奈緒、礼子、聖月をジロリと見る）」

奈緒・礼子・聖月、一斉に首と手を振って全力で否定する。

島村「では、式の日取りと詳細は後日改めて」
島村とポディーガード二人、早乙女に

深々と頭を下げ、店を出る。

早乙女「マスタくっ！」

佐原「おめでとうございます」

早乙女「みんな知ってたの？ ひどいなあ」

佐原「嬉しくないんですか？ それとも島村

様が言っていたように、他の女性が？」

早乙女「嬉しいけど、まだ頭が混乱して！」

佐原「うちの教会で式を挙げますか？」

早乙女「仏教徒だけど、いいの？ しかも俺、

住職なんだけど。一応」

奈緒「今更ですよ」

礼子「マスタも牧師のくせに神社へ初詣に

行くしね」

佐原「あつ。シート！」

早乙女「初詣といえば：教会の鐘、使ってな

いんだったら大晦日の晩、打たせてよ」

奈緒「教会の鐘を除夜の鐘に使わないですよ！」

早乙女「ダメ？ 百八回、打ちたいなあ」

礼子「自分の寺に、鐘あるでしょ」

早乙女「こっちの方が音色が良さそうだもん」

奈緒「罰当たりねえ」

礼子「（中田を指さす）おいおい…こいつ、
また泣いてるよ」

伊集院「若いくせに涙腺が緩い奴だな」

中田「だって…いい話じゃないですか」

佐原、窓の外を見る。粉雪が舞う。

佐原「今年はホワイトクリスマスになるかも
しれませんねえ」

全員、窓の外を見る。

○教会（夜）・外

月夜。教会の鐘。遠くで汽笛の音。

○奈緒の部屋（夜）

聖月「結局、積もらなかったですね、雪」

奈緒「まだまだ冬はこれからよ」

礼子「あたしや北国育ちだから雪を見ても嬉
しくないけどね」

中田「僕は南国育ちだからワクワクするなあ」
奈緒「なんで女子会にあんたがいるのよ」

中田「いいじゃないですか。女きょうだいで
育ったから、僕もハートは女子なんです」

聖月「でも女子ばかりの中で落ち着かない
んじゃありませんか？」

中田「いや、むしろ女性のグループに入っ
てる方が落ち着くんだよなあ。どうしてだ
ろう？」

奈緒「あたしは落ち着かないわよ」

礼子と聖月、意味ありげに目配せする。

奈緒「いやいや：そういう意味じゃなくって」
中田「じゃあ、どういう意味？」

礼子「静粛に！：本日集まってもらったの
は、ちよつと相談があるからなの」

奈緒「えっ。何ですか？」

礼子「実は、ちよつと前からマスターの様子
が変なのよ」

奈緒「どういう風に？」

礼子「：クリスマススの日に、ローマ教皇が来
日するニュースは知ってるわよね？」
一同、頷く。

聖月「しかも長崎に来るんでしょ。隠れキリ
シタンの里を訪問したり、平和祈念公園

で原爆被爆者遺族と会見するって、ニュースで見ましたけど……」

礼子「そうなの。そのニュースを見ていたマスターの顔色が突然変わったの。何か思いつめたような感じで」

奈緒「ローマ法王来日のニュースで？」

礼子「ローマ教皇、ね。その直後、どこかに電話してたんだけど、外国語を喋ってたから電話の相手は、いつぞやの怪しい外国人だと思っわ」

奈緒「えっ。あの武器商人の？」

一同、顔を見合わせる。

礼子「マスター、一体、何をやる気かしら？」

中田「ひよつとしてローマ教皇の暗殺とか？」

奈緒「ええっ。まさか……!？」

聖月「ローマ教皇のパレードって、ちょうどこの坂の下を通るみたいですよ」

奈緒「いや……でも……」

中田「あり得るよ。マスターは元傭兵だったんだよね。警備が厳しいバチカンで暗殺

するのは難しいから、教皇が来日して、しかも長崎に来るって絶好の機会なのかもしれないな！」

礼子「マスターが海外特派員だった過去と、何か関係あるのかしら？」

奈緒「マスターの奥さん、外国で亡くなってるのよね。内戦に巻き込まれて！」

中田「奥さんが？それは初耳だな」

奈緒「どういう関係があるか分からないけど、もし本当にマスターが暗殺を計画してるなら：止めなくちゃ！」

聖月「でも、どうやって確かめます？マスターに直接聞くんですか？」

一同、うーんと唸る。

中田「まずは皆で、マスターの行動を見張ることにしよう。何かあれば互いに連絡すること。いいね？」

聖月「タツさんやシンさんは、どうします？」

礼子「二人にも伝えて協力してもらおう。特にタツさんは元刑事だから心強いわ」

奈緒「じゃあ私がシンちゃんに伝える。タツさんは：大ちゃんに任せていい？」

中田「嫌ですよお。僕、あの人、苦手」

聖月「じゃあ私から相談しておきます」

礼子「よし。みんな。マスターを犯罪者：テロリストにしないために、よろしく頼むわよ」

一同、頷く。

奈緒「それにしてもさあ：外国で戦争に参加して人を殺しても罪に問われないのに、日本に戻って人を殺したら重罪って：いまだに理屈がよく分かんないなあ」

聖月「結局、私達の想像が取り越し苦労だといいですけどね」

礼子「そうだよ。きっと私達、考え過ぎなのよ。何か全然違うことをマスターは計画してるのよ。何かハッピーなサプライズでも準備してるんだわ、きっと」

奈緒「そうよね。まずは、クリスマスイブのコンサートに向けて、みんなで力を合わ

せて頑張りましょ！」

○長崎の風景

アーケード街。クリスマスマスの飾り付け。クリスマスソングが流れ、多くの人々で賑わう。長崎港。石畳の坂道。

○喫茶クルス・店内

礼子「結局、ホワイトクリスマスにはならなかったわねえ」

奈緒「残念。雪が降るの早すぎたよお」

ドアチャイムが鳴る。早乙女、サンタクロースの衣装で入店。

早乙女「メリークリスマス！ ホッホッホー」

礼子「何、その格好。プレゼントくれるなら

ウエルカムだけど」

早乙女の後ろからトナカイの着ぐるみが登場。顔はトナカイのフードを深く被っているため見えない。

奈緒「きゃくトナカイも。可愛いっ」

礼子「こっちは誰よ。どうせ大二郎でしょ。顔を見せなさいよ」

礼子、嫌がるトナカイのフードを無理やり剥ぎ取ると、現れたのは伊集院。

奈緒「えっ…タツさん？」

礼子「意外…」

伊集院「だから嫌だっけって言ったんだよ。来年

は俺じゃなく、あのコソ泥にやらせるよ」

ドアチャイムが鳴る。中田が入店。

奈緒「あっコソ泥…大ちゃん、いらっしやい」

中田「メリクリです。あっサンタの衣装、

ずるい」

早乙女「これは毎年、俺がやってるの！」

中田「ずるい、ずるい」

奈緒「子供か！」

礼子「事前に相談して決めときなさいよ」

伊集院「俺のトナカイ、譲ってやるぞ」

中田「やだよ。サンタがいいよ」

ドアチャイムが鳴る。聖月、チエ口を

抱えて入店。

礼子「それ、重かったでしょう？」

奈緒「うわー高そう！ レンタル？」

聖月「いえ、父に買ってもらいました」

早乙女「（コーヒーにむせる）たった一回の

演奏のために？ 金持ちは違うねえ！：

あ、ごめん」

聖月「いえ（哀しげに首を振る）」

礼子「じゃあ、山村さん達が来る前に、最後

の練習をしようか？ マスター、もうお

店閉めてもいい？」

佐原「いいですよ。貼り紙もお願いしますね」

早乙女「自由だなあ。いつも思うけど、この

店、ホントに大丈夫？」

伊集院「今日は俺達しかいないから良いんじ

ゃないか？」

○喫茶クルス・外

奈緒、ドアに「本日貸切」の札を貼る。

○喫茶クルス・店内

礼子と聖月、楽器の調律をしている。

佐原、アップライトピアノの前に座る。

伊集院、トナカイの着ぐるみを脱ぐ。

早乙女「あれえ。もう脱いじゃうの？」

伊集院「暑いんだよっ。恥ずかしいし！」

中田「じゃあ僕も着替えて来ようかな。聖月ちゃんと礼子さんも本番はドレスアップするんでしょ？　楽しみ〜」

中田、店を出る。

○喫茶クルス（夜）・外

店の外観がイルミネーションで飾られ点滅している。

○喫茶クルス（夜）・店内

クリスマスツリー。テーブルが片付けられ、ステージがある。その前に椅子が並べられている。

伊集院「まだ始まらないのか？」

早乙女「タツさん、せっかちすぎ！」

佐原、タキシード姿で現れる。

佐原「まだ主賓はお見えでないようですね」

中田「うわー。師匠、カッコイイっす」

佐原「（照れる）馬子にも衣裳、ですかねえ」

中田「えっ。マスター、お孫さんがいるの？」

伊集院「お前、ちよっと黙っとけ」

礼子と聖月、コンサートドレスで登場。

早乙女「わあ、すぐ綺麗！」

中田、口笛を吹き、写真を撮る。

伊集院「可憐だ！」

聖月「恥ずかしいなあ、この格好」

礼子「慣れるわよ。あたし、もっと恥ずかし

い服だって持ってるわよ」

早乙女「どんな？ 今度、着て見せてよ」

ドアチャイムが鳴る。真理が入店。

礼子「あっ：ママ！」

真理「皆さん、こんばんは。礼子ちゃん、驚

かせてごめんね」

礼子「（奈緒を見る）また内緒で呼んだの？」

佐原「いいえ。今回は私が招待しました。せ

っかくの娘さんの晴れ舞台ですからね」

礼子「あ、ありがと：マスタ」

真理「そのドレス、音大に合格した時の？」

礼子「ママに似て、物持ちが良いでしょ？」

ドアチャイムが鳴る。島村、里香、ボ

ディーガード二人が入店。

早乙女「里香ちゃん：お義父さんも：（佐原を見る）マスターが？」

佐原「今夜は婚約披露パーティーも兼ねて：」
島村「（咳払い）お義父さんと呼ぶのは、ちよつと気が早いんじゃないかな」

里香「せん：真一さん」

早乙女「里香ちゃ：（島村を気にする）さん」
島村「好きに呼び合えばいいじゃないか」

佐原「皆さんご着席下さい。（入口付近に立っているポディーガード二人に）あなた方もどうぞ、一緒に」

ポディーガード二人、戸惑う。島村、頷く。ポディーガード二人、席に着く。
ドアチャイムが鳴る。車椅子に乗った久実を山村が押しながら入店。

佐原「ようこそお越し下さいました」

山村「本日はお招きありがとうございます」

久実「遠慮がなくて恥ずかしいですけど」

佐原「とんでもない。今夜は楽しんで下さい。

では：（奈緒に合図をする）」

奈緒、壁のスイッチを操作する。店内の照明が暗くなり、ステージ上にスポットライト。聖月がチェロ、礼子がバイオリン。佐原がアップライトピアノへ。

奈緒「お待たせしました。カフェ・クルスの今宵限りの特別クリスマスコンサート、始まりま〜す！」

演奏が始まる。ベートーベンの「ヴァイオリンとチェロとピアノのための三重奏曲」

窓から月光が射す。優しい時間が流れる。客席の人々、うっとりした顔。

○教会（夜）・外

月の光が教会の屋根と鐘に照らされる。

○喫茶クルス（夜）・店内

最後の一音が余韻を残し響き終わる。と同時に割れんばかりの拍手喝采。

島村「（立ち上がる）ブラボー！」

聖月・礼子・佐原、並んでお辞儀。
真理、礼子に花束を渡す。

久実、山村を介して聖月に花束を渡す。
店内、テーブルを戻しパーティー仕様
になっている。テーブル上に食べ物や
飲み物。

佐原「本日は一夜限りのクリスマススイブコン
サートにお越しいただきありがとうございますござ
いました。今夜は、真一君と里香さんの
婚約パーティーも兼ねています。ささや
かですが、ごゆっくりお楽しみ下さい」

中田「ささやかじゃないよ。すごいご馳走！」

中田、写真を撮る。

伊集院「シンちゃん：いや、早乙女君と里香
さん、おめでとう。乾杯！」

礼子「里香さん、おめでとう。シンちゃんも」

伊集院「（島村に）どういうご心境ですか？」

島村「娘が幸せなら、何も言うことないよ」

伊集院「今日はマスターの招待で？」

島村「ええ。でも、婚約のお披露目だけじゃ
なくて、何かビジネスの話もあると聞い
てたんだが：（佐原を見る）」

佐原「聖月さんの演奏、いかがでしたか？」
山村「素晴らしかったです」

久実「チエ口の音色まで娘に生き写しで：まるで、みゆきが目の前で弾いて、私達に何かを語りかけているみたいでした」

奈緒「でも聖月ちゃん初めてチエ口に触ってまだ三か月なんですよ」

聖月「あくん、言わないで」

山村「えっ。そうなんですか？」

山村・久実、驚いて顔を見合わせる。

久実「信じられないわ。とつてもお上手」

山村「佐原さん」

佐原「はい？」

山村「実は私達、今日のコンサートが終わったら、もう皆さんとお会いできない遠い所へ旅立つ予定だったんです」

佐原、何も言わず頷く。

山村「みゆきは、私達の生き甲斐でした。あの子が亡くなった直後、事業が失敗しましてね。田舎の旅館を代々経営してるん

ですが、私の代で手放さねばならないほど業績が悪化しまして：さらに駄目押しが、家内の病気でした。日に日に進行して治る見込みは難しいと医者からも言われてるんです」

久実「あなた：（山村の手を取る）」

佐原「今日は山村様に紹介したい方がいるんですよ。島村さん！（島村を呼ぶ）」

島村、近くに来る。

佐原「こちら、ホテル業界では有名な方なのでご存知かと思いますが、アシユレーホテルのオーナーの島村様です。（島村に）こちら、箱根で旅館を經營されている山村様です」

山村と島村、互いに挨拶する。

佐原「島村様、来年は関東進出を計画して、提携していただける老舗旅館を探している」と伺いましたが：」

島村「そうだが。あっ：ひよっとして？」

佐原「（にっこり笑う）ええ。島村様の計画

にぴったりの旅館だと思ひましてね。山村様も資金援助をしていただけの大手ホテルを探していたんですよ？」

山村「ええ。でも、なかなか見つからなくて。（島村を見て）…あっ」

佐原「では、そういうことで」

山村と島村、名刺交換を始める。

久実「佐原さん、ありがとうございます」

佐原「いえいえ。あ、聖月ちゃん」

聖月「はい」

佐原「（久実に）聖月ちゃんはね、将来有望な医師の卵なんです。医者になったら奥様の病気を治すんだって、頑張つて勉強してるんですよ」

久実「まあ…」

佐原「司法試験も合格してるから、旦那様の事業のお手伝いも出来るかもしれませぬ」

聖月「もう、マスター、欲張りすぎですよ」

佐原「でも、そのつもりなんでしょ？」

照れる聖月。感激している久実。

礼子と真理、手を取り合っている。

真理「礼子ちゃん、良かったわよ。やめてからも、ずっと練習続けてたんでしょ？」

礼子「ブランクが長いから不安だったけど、ママが大事にしてくれてたから：（バイオリンを見る）すぐに感覚が蘇ったの。本当にありがとう、ママ：」

中田、忙しそうに写真を撮っている。

奈緒「写真はもういいから、大ちゃんもこっち来て、一緒に飲みなさいよ」

中田、奈緒を低いアングルから撮影。

奈緒「こらっ。下から撮るなっ！」

佐原、皆の様子を優しく見つめるが、そっと気づかれないようにカウンター奥に入り消えていく。

○長崎の風景（朝）

朝の光が包む長崎港。石畳の坂道。

○教会（朝）・外

扉に「閉鎖／CLOSE」の貼り紙。

○喫茶クルス（朝）・外

扉に「本日、臨時休業」の貼り紙。

○喫茶クルス（朝）・店内

奈緒、礼子、早乙女、伊集院、聖月が
浮かない顔をしている。

早乙女「一体どうしたっていうんだよお……」
テーブルの上に封筒が置かれている。
手書きで「皆さんへ」と書かれている。

伊集院「これ、読んでもいいか？」

伊集院、封筒を開く。

礼子「大したことは書かれてないのよ。教会
とお店の権利関係とか、光熱費の支払方
法とか……マスターがいなくてもやってい
けるように実務的な事ばかり。で、最後
に『今までありがとうございます。皆
さん、お幸せに』って……」

早乙女「こりゃヤバイな」

奈緒「銀行の通帳とかキャッシュカードとか
も沢山置いていったの。驚いたんだけど、
うちの店って赤字のはずよね？」

伊集院「そりゃ、そうだろうな」

奈緒「でも通帳の残高を見てびっくり。たぶん小さな国だったら買えるんじゃないかしら」

早乙女「それはびっくりと言うより予想通りかも」

聖月「それで、マスターはどこに行っちゃったんですか？」

奈緒と礼子、分からない、と首を振る。

聖月「どうしましょう」

早乙女「マスター、どうするつもりかな？」

伊集院「やっぱり例の件か……」

一同、顔を見合わせる。

早乙女「ローマ教皇暗殺計画か……」

礼子「マジかよお」

奈緒「（泣きそうに）どうするうさ？」

ドアチャイムが鳴る。中田、入店。いつもと違う伶俐な雰囲気と冷たい目。

奈緒「あれっ。大ちゃん、なんかいつもと雰囲気が違う：イメチェン？」

早乙女「大二郎、お前『呑気屋』を辞めたんだって？ 急だったんで大将がびつくりしてたぞ。辞めてどうするんだよ？」

礼子「そんなことより早く大ちゃんも話に加わって。大変なのよ。マスターがね……」

中田「ローマ教皇の車列は、この真下の県道を午後三時ちょうどに通過。佐原悟は、このタイミングを狙って、どこかから狙撃するつもりだろう。奴は一流のスナイパーだからな」

奈緒「大ちゃん……？」

伊集院「ようやく正体を現したな。単なるコソ泥じゃないのは分かってたが。お前、俺の嫌いな人種だな。公安だろ？」

早乙女「コーアン？」

伊集院「テロ対策や潜入捜査のプロだよ。俺が警察学校の教官だった頃、優等賞を貰って公安に一本釣りされた生徒がいた。受け持ちの教場じゃないから記憶が曖昧だった……が……」

中田「光荣です教官。きっかけは、武器商人が接触したがつている元傭兵の日本人がいるという情報でした。上手く近くに潜り込みましたが、結局、取引を断ったと聞いてホッとしたんですよ。おかしいな：情が移ったかな？」

伊集院「心にもないこと言うなよ。相手の懐に入り込む手腕は、さすがだな」

中田「何度もお褒めいただき光荣ですが、教官、私は犯罪を阻止する責務がありますので、皆さんにお聞きしなければなりません。佐原悟は今、どこにいますか？」
一同、沈黙する。

中田「このまま彼が犯罪者になっても構わないですか？ 止められるのは、あなた達だけですよ」

奈緒「マスターはテロリストなんかじゃないわ！」

中田「テロリストとは言ってますんよ」
礼子「でも、ローマ教皇を暗殺したらテロリ

ストでしょ？」

中田「一枚の写真テーブルに置く。

ローマ教皇と警護兵が写っている。

中田「佐原悟のターゲットはローマ教皇では

ありません。この男です」

中田「写真の警護兵を指差す。

伊集院「ローマ教皇の護衛：警護兵か？」

中田「そうです。ローマ教皇に付く警護は、

伝統的にスイスの傭兵が任務に就いてい

ます。いわゆるスイス衛兵です」

礼子「傭兵？：あっ！」

中田「この男はスイス傭兵の中では珍しくタ

チの悪い奴だね。どうやってローマ教皇

の護衛になれたのか不思議ですが、アフ

リカや中東の紛争地で相当乱暴なこと

をして荒稼ぎしたらしいですよ」

奈緒「そういえばマスターも特派員としてア

フリカや中東にいたことがあるわ：」

中田「佐原悟が特派員として駐在していたあ

る国で、クーデターが起きました。その

時、この男がクーデター軍に金で雇われました。一般市民に対する無差別発砲で大勢の民間人や外国人も巻き添えになりましたが、この時の襲撃部隊を指揮していたのが、この男なんです」

○（回想はじめ）中東の国

無差別に発砲する軍人達。指揮している男、ダニエル（42）。市民が逃げまどい、バタバタと倒れる。

中田（声）「路上で平和を訴えて合唱していた人々が巻き添えになったのは、偶然だったのか宗教的な理由だったのか分かりません。いずれにしろ、その中に佐原悟の妻がいました」

様々な人種・性別・年齢の合唱団の人々が、銃撃の中を逃げまどい、次々と倒れる。日本人らしき親子の父母が倒れ、幼い少女がはぐれる。銃弾が飛び交う中、美佐子が少女を庇って覆い被さる。その背中を撃つダニエル。少

女は髪に白い水玉模様の赤いリボンを着けている。

中田（声）その後、佐原悟は通信社を辞めて、傭兵として反乱軍に加わった。クーデター軍に復讐するためだったのでしょう。そして、無差別銃撃の責任者がダニエルという傭兵であることを突き止めた。その後、マスター：佐原悟は傭兵として世界を転々としながらダニエルの行方を追ったが、なかなか追い詰めることが出来ず、やがてダニエルはバチカンでローマ教皇の衛兵になってしまい手が出せなくなってしまった」

佐原の傭兵姿。狙撃銃を構えている。

○（回想終わり）

早乙女「マスターは一旦諦めたんだな。ところが今回のローマ教皇来日で、ダニエルがすぐ近くに来ることを知り、復讐心が蘇った：そういうこと？」

伊集院「なるほど。マスターはローマ教皇が

来日するニュースを見てて、教皇の隣に映っている護衛兵の顔を見て気付いたのか：「

中田「そうでしようね。実際に日本国内で警護を担当するのは日本の警察ですが、バチカンの護衛兵は常に教皇と行動を共にしますから、一緒に来日するでしょう。佐原悟もそのことは知っているはずですよ」

伊集院「どうしてそんな重要な情報を俺達に教えてくれるんだ？」

奈緒「大ちゃん、マスターの友達だから：だよね？」

中田「取引ですよ。背景事情を教えてあげたんだから、さあ、今度はあなた方の番です。佐原悟の居場所を教えて下さい」

礼子「私達も知らないのよ：」

伊集院「いや：仕方ないな。マスターを犯罪者にするわけにいかないだろう。マスターは、この坂道の下の県道沿いの教科書倉庫だったビルにいると思う。たぶん三

階の道路側の部屋だ」

奈緒「えっ。タツさん、マスターの居場所を知ってるの？」

伊集院「みんなに黙ってて悪かったが、ひと月前にマスターを尾行させてもらったんだ」

○（回想はじめ）喫茶クルス・店内

佐原「ちよつと出かけてきます」

佐原、店を出る。伊集院、その後を尾行する。佐原、坂を下りきった道路に面した雑居ビルに入る。後を追う伊集院。佐原、階段を三階まで上り、部屋に入る。伊集院、部屋の前で立ち止まる。

○（回想終わり）

早乙女「（中田に）どうするつもりだよ。マスターを逮捕するのか？　まだ何もやってないんだぞ！」

伊集院「いや。もう既に銃刀法違反と殺人予備罪：下手すると、これから殺人未遂や

殺人になる可能性も：その前に止めないと」

早乙女「（悔しそうに）ちくしょう…」

奈緒「大ちゃん、嘘よね：冗談でしょ。ドツキリなんでしょ。もう、やめてよね！：もう…」

礼子「（中田に）あんた、最初からマスターに近づく目的で？」

中田「それが僕の仕事ですから。住み込みで働いたら一番良かったんですけど、奈緒さんが先に住み込みで雇われたのは想定外でした。参りましたよ」

礼子「病気の妹がいるってのも嘘だったのね？」

中田「ああ、それは：本当です」

奈緒「ぜんぶが嘘じゃないのね。だったら私達との思い出も嘘ばかりじゃないよね？」

中田「嘘にほんの少し真実を紛らせるのが、プロの潜入技術です」

奈緒「大ちゃん！（涙声）」

中田、奈緒の涙声に一瞬怯むが、気を取り直す。

中田「情報、ありがとうございます」

礼子と伊集院、中田に冷たい視線を向ける。

中田「（いつものようにおどける）ああ、怖い怖い」

中田、店を出て行こうとする。

ふと、ドアの前で立ち止まる。

中田「（背中を向けたまま独り言）あ。忘れてた。僕、今日は非番だった。昨日は徹夜だったから帰ってすぐ寝ようかな。まだ上司に報告してないけど、いつか。午後三時きっかりに応援を要請して逮捕に向かうけど、眠いからギリギリでいいかなあ。（わざとらしく欠伸）」

中田、店をでる。

奈緒「（泣きそうな顔）あいつ…」

礼子「時間がないよ。急がなきゃ」

早乙女「でも、普通に説得しても無駄だと思うよ。マスターの気持ちを考えると……」

伊集院「このまま何もしないつもりか？」

聖月「あのお：私、提案があります」

一同、聖月を見る。

店の柱時計が、十時を指している。

奈緒・礼子・早乙女・伊集院・聖月、

それぞれ、どこかへ電話をかけ始める。

○礼子の実家

真理、電話に出る。

○長崎市内のホテル・フロント

山村「チエツクアウトをお願いします」

受付「あつ山村様。お電話が入っております」

山村が電話を取る。

○島村の会社・社長室

机上の電話が鳴る。島村、受話器を取

り、うんうんと頷き、受話器を置く。

島村、再び受話器を持ちボタンを押す。

島村「出かけるぞ。車を出せ」

○教会・外

礼子、扉の貼り紙「閉鎖／CLOSE」
を外す。坂道を上って、合唱団のメン
バーが次々と教会前に現れる。

○教会・中

合唱団全員が集合している。

奈緒「皆さん、事情は今説明した通りです。

時間がありません。急ぎましょう！」

教会の中の時計が十二時を指している。

○高速道路

黒塗りの高級車が走る。

島村、車内で腕組みをしている。

○旅客機・中

真理、機内の座席で腕時計を見ている。

○教会・中

合唱団が練習している。

扉が開いて、山村夫妻が入って来る。

柱時計が二時を指す。

礼子「皆さん、そろそろ行きましょう」

○教会・外

合唱団の人々、教会を出て坂道を下り

始める。奈緒、一人だけ喫茶クルスへ向かって歩き出す。

礼子「ちよつと奈緒ちゃん。どこ行くの？」

奈緒「（振り返る）私：マスターのそんな姿

なんて見たくありません。マスターは、ここに帰ってきます。信じてます：」

奈緒、走って喫茶クルスの扉の張り紙「本日、臨時休業」を破り、店に入る。

礼子「奈緒ちゃん：」

礼子、少し迷うが諦めて皆と一緒に坂道を下りていく。

○道路沿いの雑居ビル・三階の一室

薄暗がりの中、佐原がスーツケースを開く。中から部品を一つ一つ取り出し、慣れた手つきで組み立てる。狙撃銃が完成。佐原、狙撃銃を手に窓辺へ行く。首に三日月型のペンダントが光る。

○（回想はじめ）外国のレストラン

テーブルで向かい合う佐原と美佐子。

美佐子「私ね、いつか、素敵な音色の鐘が鳴

ると信じているのよ」

佐原「鐘？」

美佐子「教会の鐘の澄んだ音がね：この世界に本当の平和や、本当の愛が訪れた時に鳴るって信じてるの」

佐原「どんな音色だろうね、その鐘の音は」

美佐子「人それぞれに違う音かもしれないわね。人それぞれに世界があるように」

佐原「一緒に聴きたいな。その鐘の音を：」

○（回想終わり）雑居ビルの一室

佐原、窓の外を見る。窓の下に空き地。その向こうに道路。沿道には、□ーマ教皇を迎える市民の列。遠くから歓声。□ーマ教皇の車列がゆっくりと進んで来る。車列の脇を歩くダニエルの姿も見える。

* * *

（フラッシュユ）

美佐子「人を責めちゃ駄目よ。何があっても絶対に人を責めちゃダメ。人を責めたく

なったら、自分の心の弱さを責めるのよ
：「

佐原（声）「無理だよ。美佐ちゃん：僕には
無理だよ：」

* * *

佐原、窓から狙撃銃を構え、スコープを覗く。照準器の中に、群衆、道路、やや離れて車列が入る。佐原、スコープから目を外し、腕時計を見る。二時五十分を指している。その時、激しくドアを叩く音。

早乙女（声）「マスター！ マスター！」

礼子（声）「いるんでしょ?! マスター！」

ドアが蹴破られ、伊集院が入ってくる。

伊集院「もう終わりにしよう、マスター」

礼子と早乙女も入ってくる。

佐原、彼らを見て寂しそうに微笑む。

佐原「私はあなた方が思っているような人間

ではありません。どうか帰って下さい」

礼子「いいえマスター。あなたは私達が思っ

ているような人よ。お願い、戻って」
早乙女「こんなこと、やめようよ」

佐原「そこから先に入らないで下さい。ピアノ線を張り巡らせています。触れるとビルごと吹き飛びます。あなた方が来るとは思わなかったのです。すみません」

伊集院「マスター。外を見てみるよ。窓のすぐ下を」

佐原、警戒しつつ窓の下を見る。空き地に合唱団の人々が佇み、佐原を見上げてている。

佐原、問いかけるように振り向く。

礼子「マスターの言葉に救われた人達よ。みんな、マスターの帰りを待ってるのよ。早く戻って一緒にクリスマスを過ごそうよ」

佐原「私の言葉じゃないんです。私が皆さんに言ってきた言葉は、全部、美佐ちゃん。私の妻が言っていた言葉なんです。本当は私の言葉なんかじゃない。」

礼子「それでも、みんなの心の届いたわ。胸に響いたのよ。マスターの中で奥さんの言葉が生きてるからでしょ。だからもう、マスターの言葉なのよ」

佐原「……」

伊集院「マスターが復讐しようとしてるダニエルという男のこと調べたよ。奴は引退した後、傭兵時代に稼いだ金を全て戦争孤児の支援団体に寄付したそうだ。そして神に仕える道を選んだが、奴が選んだのはマスターのような牧師や神父じゃなくて、ローマ教皇の護衛という仕事だった。よく分からないが、奴にも色々あったんじゃないか？奥さんと子供二人：家族もいるらしい。マスター、よく考えてくれ。本当に、これでいいのか？」

佐原「……」

伊集院「（礼子と早乙女に）行こう」

礼子「でも……」

伊集院「いいから」

礼子・早乙女・伊集院、部屋を出る。
礼子「（部屋を出ながら）マスター、しっかり聴いててね」

佐原、気を取り直して狙撃銃を構える。

○喫茶クルス・店内

奈緒、柱時計を見る。午後二時五十九分を指している。

奈緒、不意に立ち上がり走り出す。

○教会・外

奈緒、教会の中へ駆け込む。

○教会・中

奈緒、階段を駆け上がる。

○雑居ビルの一室

佐原、狙撃銃を構えている。

沿道の群衆の歓声が高まる。ローマ教

皇の車列が近づいてくる。

照準器の中に、ダニエルの姿が収まり

かけた、その時：

「アメイジング・グレイス」の合唱が聞こえ始める。

佐原、窓の下を見る。空き地で歌う人々。その中に、礼子、早乙女、伊集院、聖月……。

早乙女（声）「マスター、聴いてる？俺達、猛特訓したんだぜ。こんなに上達したんだよ。聴いてる？」

礼子（声）「マスター、見て。マスターに幸せをもらった人達の歌声よ。みんな、あなたのおかげで、こんなに幸せなクリスマスを迎えているのよ」

聖月の両脇で山村夫妻も歌っている。礼子と真理が仲良く並んで歌っている。早乙女と里香が手をつなぎ歌っている。島村も一生懸命に歌い、少し離れた場所でもボーディーガード二人も歌っている。他のメンバーも、一人一人が明るく澄んだ表情で、窓を見上げて歌っている。照準器の中に、ローマ教皇の車とダニエルの姿が入る。佐原、引き金の指が微かに震える。

と、その時。突如、鐘の音が鳴り響く。

○長崎の風景

教会の鐘が揺れて鳴る。大きな澄んだ音が港に、石畳の坂道に響き渡る。沿道の人々、不思議そうに見渡す。

○教会・鐘楼

奈緒、懸命に鐘を揺らして鳴らす。泣きながら叫んでいる。

奈緒「もう愛はあるよ！ マスター！ この世界に愛はあるよ！ マスターが教えてくれたんじゃないの！ 愛はあるよおー！ ーっ！」

○沿道

人々の歓声の中を車列が進んでいく。
□ーマ教皇の車の窓が下がる。傍を歩くとダニエルが窓に近づく。

□ーマ教皇「Bellissimo suono di campana！」

（字幕）「美しい鐘の音ですね！」

ダニエル、鐘が鳴る方角を見上げる。

初めて優しい顔を見せる。

ダニエル「エレベーター」

（字幕）「そうですね」

遠ざかるローマ教皇の車列。

○雑居ビルの一室

窓辺でライフルを構えたまま静止した

佐原の後ろ姿。微動だにしない。

鐘の音が薄暗い部屋の中に響く。

○長崎の風景（朝）

長崎港。汽笛が聞こえる。石畳の坂道

を歩く人々の中に晴れ着姿も混じる。

○教会（朝）・外

扉になぜか注連縄が飾ってある。

○喫茶クルス（朝）・外

入口ドアに門松と注連縄の飾り。

○喫茶クルス（朝）・店内

初詣帰りの客で賑わう。奈緒と礼子、

晴れ着姿で忙しく立ち働いている。

礼子「奥のテーブルにホットココア追加ね！」

奈緒「はい、店長！」

ドアチャイムが鳴る。伊集院が入店。

伊集院「明けましておめでとう」

奈緒「あっ：おめでとうございます」

伊集院「なんだか忙しそうだね。商売繁盛、

結構結構！」

早乙女「言い方が古臭いんだよな、タツさん」

伊集院「なんだ、いたのか」

早乙女「明けましておめでとうございます」

伊集院「あけおめ。ことよろ」

早乙女「無理に若ぶらないですよ。てゆうか、

それも相当古いよ」

団体客がレジで勘定を終えて出て行く。

奈緒「ふう。元旦早々忙しかったわね。ねえ、

店長（礼子を見る）」

礼子「うん。早くマスターに戻ってきて欲し

いわね」

一同、しんみりする。

ドアチャイムが鳴る。中田が入店。

中田「あけおめ！ことよろ！」

伊集院「なんだよ、お前。今更：」

礼子「無理にキャラクター、戻そうとしてるでしょ？」

中田「いやあ。本当の自分がどっちなのか、分かんなくなつて：どっちがいい？」

礼子「知るか！」

中田「というわけで、今年からはプレイヤートで常連客となりまゝす。ことよろゝ」

早乙女「うーん：メンタル強い奴だなあ」

伊集院「おい、お前」

中田「：」

伊集院「これは十二月二十六日の新聞だ。武器商人のクリスティアンが逮捕されたって記事がある。でも、実際に逮捕したのは、もっと前だろ？　記事が出るのを差し止めていたのか？」

中田「日本の警察にそんな権力がないのはご存知でしょ。逮捕の発表を遅らせただけですよ。クリスマスの翌日まで」

早乙女「ちよつと待ってよ：。そうすると、マスターは一体誰からライフルを？」

伊集院「買ってないのさ」

早乙女「えっ？」

伊集院「（中田に）お前さんが説明しろよ。

友達みんなに：な」

中田「：こういう事です。警察は武器商人のクリスティアンを以前からマークしていました。奴を捕まえるには、日本に武器を持ち込んだ密輸現場を押さえるか、取引相手に武器を渡すところを押さえるしかありません。我々は、韓国経由で長崎港へクリスティアンが入国した瞬間を取り押さえました。ここまでが警察の仕事でした。あとは：」

伊集院「安心しな。ここには警察関係者はいないぜ。俺はもう一般市民だし。お前の：（そっぽを向いて）友達だ」

中田「：押収したクリスティアンの電話にマスターから連絡がありました。ライフルと実弾を入手したいと。僕はボイスチェンジャーで声を変えて別人になりすまし、

クリスティアンは急用で帰国した、自分はクリスティアンの代理人だと嘘を言い、取引を持ちかけました」

早乙女「そして、実際に売り渡したのは偽物のライフルと弾丸：ってこと？」

伊集院「ご名答」

中田「巧妙なモデルガンでした。一流のプロでも偽物とは見抜けませんよ」

早乙女「でも、マスターは引き金を引かなかったよね？」

礼子「ということとは：」

奈緒「えっ何？　　どういうこと？」

伊集院「マスターは何の罪にも問われない。

銃刀法違反も殺人予備も未遂も。な？」

中田「はい。聖月ちゃんがいたら詳しく法律を説明してくれたでしょうけど」

奈緒「まあ、私は説明されてもチンプンカンプンだと思っわ」

伊集院「粹なこと、やるじゃねえか」

中田「僕も一生に一度くらいはサンタクロー

スになりたいですから」

礼子「ああ：だったらマスター早く帰ってくればいいのに！」

奈緒「どこにいるんでしょうねえ：」

中田「あれっ。そういえば聖月ちゃんは何？」

奈緒「年末から山村さんの所に行ってるわよ」

礼子「もう本当の娘みたいよね。このまま養

女になっちゃうのかな」

奈緒「ところで聖月ちゃんの苗字、なんてい

うの？」

早乙女「そういえば知らないな：」

奈緒「えっ。みんなも知らないの？」

中田「それにしても残念。聖月ちゃんの晴れ

着姿、見たかったなあ」

奈緒「あたし達じゃ、ご不満ですか！」

中田「いえいえ！滅相もない！」

奈緒「あ：タツさん、聞いて下さい。昨日、大変だったんですよ。シンちゃんがね、

うちの教会の鐘を、こっそり鳴らそうと
したんですよ！」

早乙女「だって、あんなに綺麗な音がするって分かったんだし。まだ使えるんだから勿体ないでしょ」

奈緒「だからって教会の鐘を除夜の鐘代わりに鳴らそうとするのはダメでしょ！」

礼子「タツさん、これって何か罪になるんじゃない？ 住居侵入とか。夜中にこっそり忍び込んだんだから」

中田「なぜか耳が痛い……」

伊集院「建造物侵入罪。三年以下の懲役又は十万円以下の罰金」

礼子「逮捕してよ」

早乙女「どうかお許しを（礼子を拝む）」

奈緒「そういうえば、こつち（中田を見る）も警察官だったわね。現役の方に頼む？ ……
ってゆーか思い出したけど、あんたも不法侵入したじゃない！」

中田「そんな昔のことを持ち出さなくても……」

奈緒「ついこの間じゃない！」

礼子「そうよねえ。ついこの間……なのよねえ」

○（回想はじめ）

カウンタでコーヒーを入れる佐原。
常連客と笑い合う佐原。
教会の壇上で説教をしている佐原。
合唱を指揮している佐原。

○（回想終わり）

奈緒、店を出る。

○喫茶クルス（朝）・外

教会の鐘やステンドグラスが輝く。
奈緒、少し歩く。長崎港が見える。

奈緒「（青空を見上げて）マスター、どこに

いるのよおっっ」

○長崎の風景

桜の花びらが舞う石畳の坂道。

○喫茶クルス・店内

まったりとした雰囲気。

早乙女「春うらら。コーヒー傾け、夢すすする

：字余り」

中田「字、余ってないと思うけど」

伊集院「のどかなあ：」

奈緒「のどかですねえ……」

礼子「バタバタと二階から駆け降りる。」

礼子「つけて！　つけて！　早くーっ！」

早乙女「何、何、何?!」

奈緒「どうしたの？」

礼子「て、テレビ……つけて。急いで！」

奈緒、リモコンでテレビをつける。

画面に砂漠の風景が現れる。

テレビの声「……このように現地では日本人ボランティアが地道な草の根レベルの活動を続けています。その中の一人が、今回紹介する佐原悟さんです。佐原さんは、牧師として現地で活動し……」

（テレビ画面）

村の小さな教会で説教をしている佐原。

早乙女「マスター……こんな所に!？」

伊集院「いやいや。想定内だな」

奈緒「マスター……」

テレビの声「佐原牧師は今年、村の聖歌隊を結成しました。それでは、彼らの歌声を

聴きましよう」

（テレビ画面）

現地の人々による合唱団。

佐原が指揮棒を振り、「シュガー・ベ

イビー・ラブ」（英語）をアカペラで、

ゴスペル風に歌い始める。

奈緒「かつこいいい：！」

早乙女「：すごいな」

中田「師匠さっ（目を潤ませる）」

聖月「素敵です」

伊集院「（小さく呟く）ゴスペル風もいいな」

○エンディング

楽しそうに合唱する人々と佐原。

「シュガー・ベイビー・ラブ」の歌声

と共に合唱団の姿がだんだん小さくな

り、村の全景。やがてアフリカ大陸。

地球。太陽系。銀河系。広大な宇宙：。

星空にエンディング・タイトルが流れ、

今までのシーンのカットと共に、教会

で「シュガー・ベイビー・ラブ」（日

本語版）をゴスペル風に合唱する出演者たち。

（ E N D ）